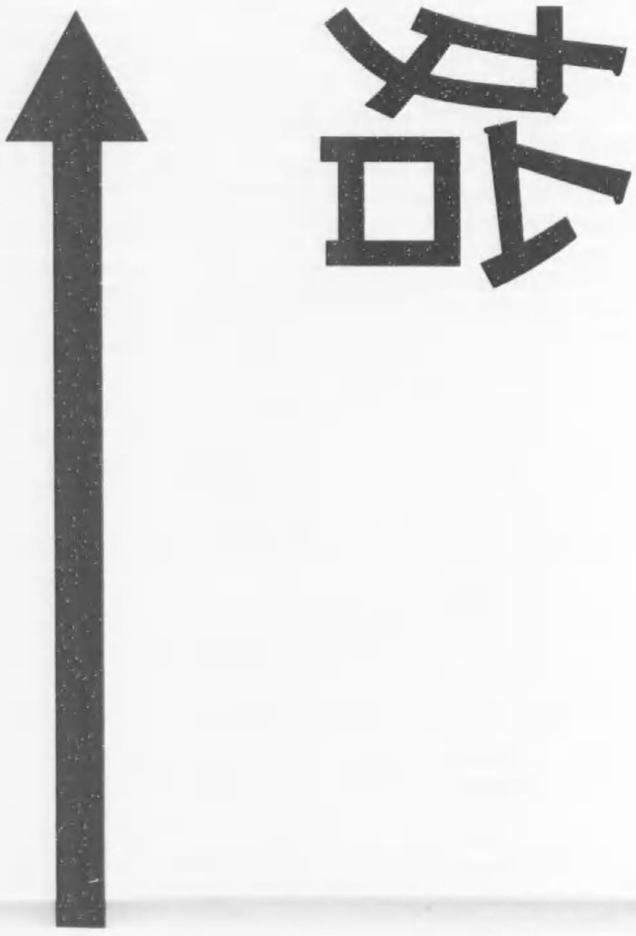
滿洲帝國地圖
韓川
川九八


給

特111
114イ
396-397

發刊の趣旨

絶景の連續たる我黒部峽谷は、從來本郡敎育會其他篤志家の紹介に依り、天下の奇勝として年次世の注目を引くに至つたのであるが、此際一層之を紹介して遊覽者の案内に便せんとし、郡會の議を經て本書を刊行するに至つた次第である。

大正12.6.26
内交

本書は匆忙の際編纂に從事したもので、取材に行文一に意に充たない點が尠くない、されど峽谷に關して一通りは明にした積である、讀者幸に諒せられんこ

とを。

一本書編纂に關し本縣立魚津中學校教諭吉澤庄作氏から多大の援助を得又地方人士にして直接間接に便宜を與へられたことは茲に特筆して感謝の意を表し置く次第である。

大正十一年六月

富山縣下新川郡長　桑島虎次郎

改訂に就て

天下の絶景、**黑部峽谷**を廣く世に紹介せむが爲め、大正十一年郡費を以て、**黑部遊覽**、を發行し、一般登山家の大なる歡迎賞讃を博し來りしが、其後黑部鐵道の一部開通及愛本温泉の移轉計畫等、初版當時と狀況を異にするものあるを以て、訂正刊行の希望を抱き居りし處、偶々魚津町新村商店來りて、尙廣く之を頒布し以て一般世人の希望に應せむ事を乞ひたれば、黑部宣傳の一策として當廳之を承認し、曩に編纂の任に當

りし關係より、余は更に之を改訂修補し、刊行せしむるに至つた次第である。

大正十二年六月

富山縣下新川郡書記　三由安太郎

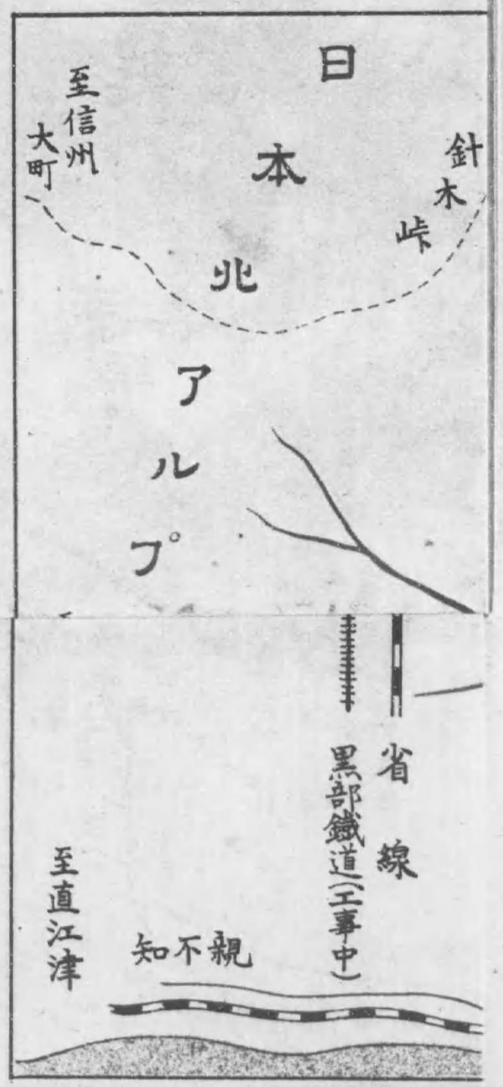
目次

一、はしがき……一
二、峽谷の探勝……四
1. 愛本より黑薙まで……五
愛本橋……五
國有林地帶……一〇
黑薙温泉……一二
二見温泉……一四
2. 黑薙より鐘釣まで……一五
黑薙橋附近……一五
七谷越……一六
東鐘釣山……一七
新鐘釣温泉……一八
鐘釣温泉……一九
百貫山……二一
3. 鐘釣より祖母谷まで……二三
小黑部山……二四
猿飛……二六
奥鐘山……二七
祖母谷温泉……二八
4. 峽谷の秋色……三〇
三、峽谷より諸高山へ……三五
1. 白馬岳へ……三七

祖母谷方面より……三七
猫又川より……三九
黒薙方面より……四〇
2. 鑓ヶ岳へ……四一
3. 大黒方面五龍山より
鹿島鎗ヶ岳へ……四二
4. 劔山並立山へ……四三
四、峽谷の事業……四四
1. 水力電氣……四四
2. 電氣鐵道……四六
3. 温泉經營……四八
附記
黒部保勝會……五〇

附圖

黒部峽谷略圖……
黒部峽谷交通網及里程概要……
外に
挿入寫眞……二十五枚



黑部峽谷交通網及里程概要

峽谷ノ里程ハ愛本橋ヨリ起算ス

祖母谷方面より……三七
猫又川より……三九
黑薙方面より……四〇
2. 鑛ヶ岳へ……四一
3. 大黑方面五龍山より
鹿島鎗ヶ岳へ……四二
4. 劔山並立山へ……四三
四、峽谷の事業……四四
1. 水力電氣……四四
2. 電氣鐵道……四六
3. 温泉經營……四八
附記
黑部保勝會……五〇

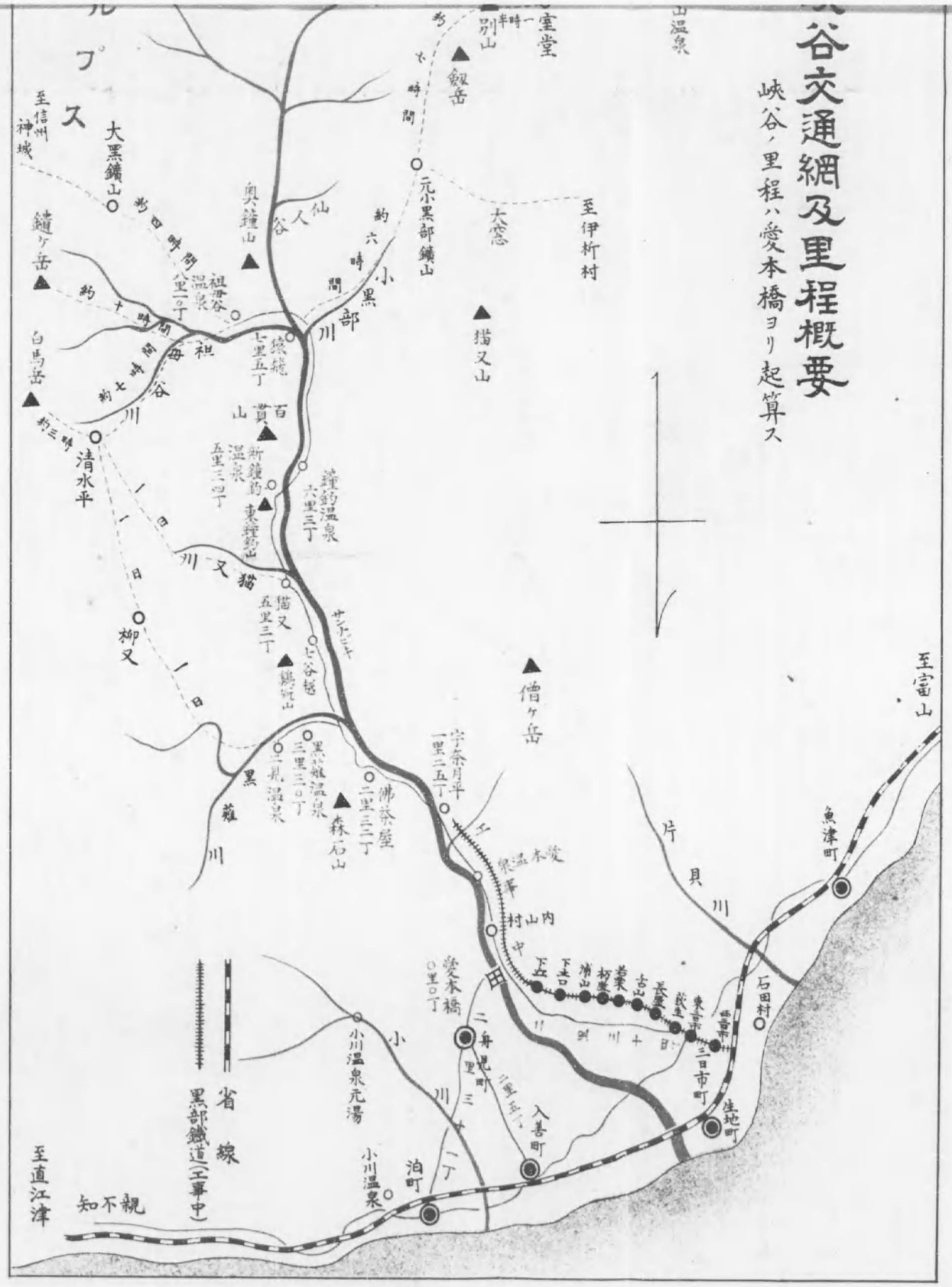
附一 黑部峽谷略圖
黑部峽谷交通網及里程概要 外に挿入寫眞

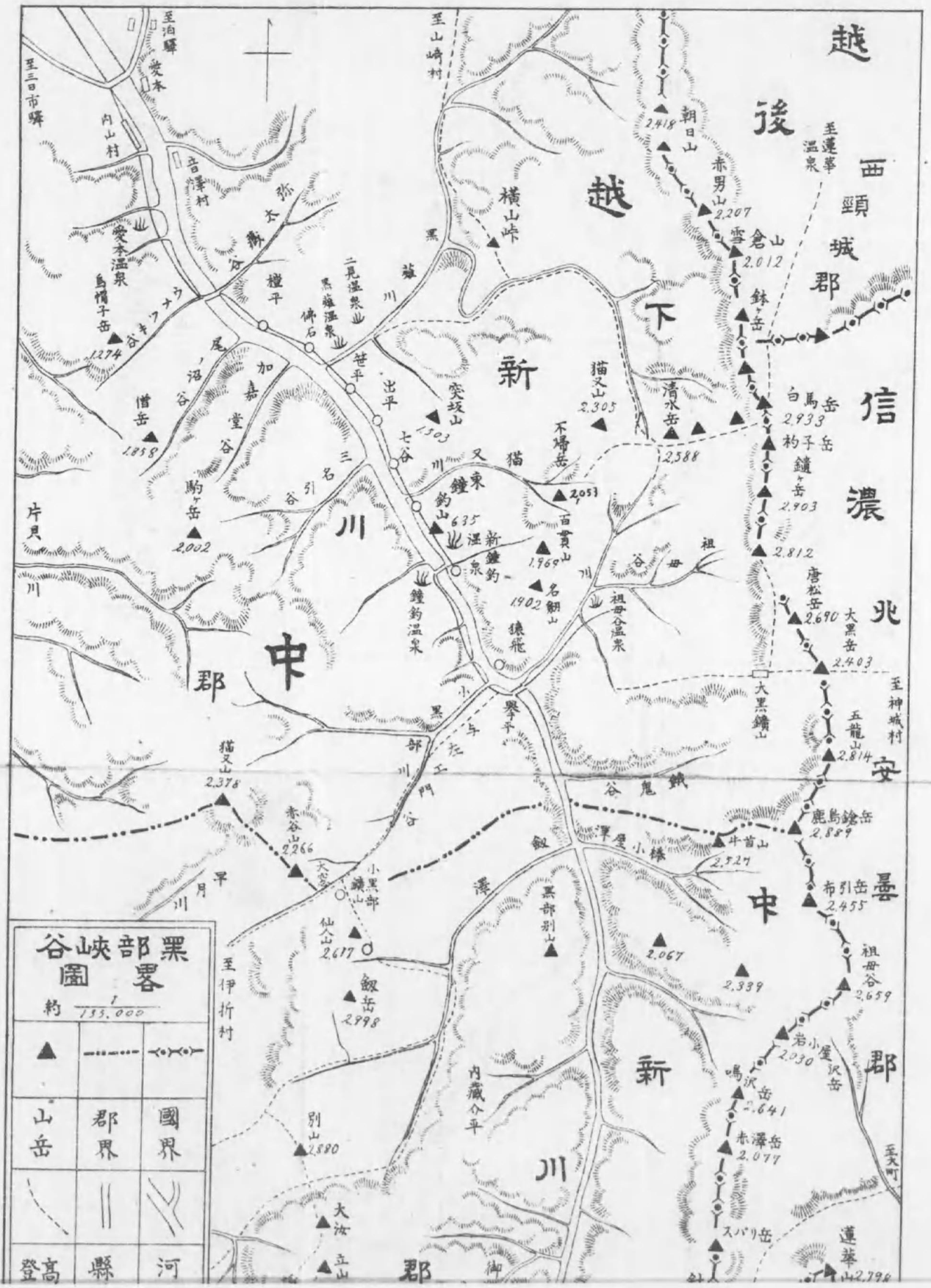
祖母谷方面より……三七
猫又川より……三九
黒薙方面より……四〇
鏈ヶ岳へ……四一
大黒方面五龍山より
鹿島鎗ヶ岳へ……四二
劔山並立山へ……四三
四、峽谷の事業……四四
1. 水力電氣……四四
2. 電氣鐵道……四六
3. 温泉經營……四八
附記
黒部保勝會……五〇

附圖
黒部峽谷略圖……
黒部峽谷交通網及里程概要……
外に
挿入寫眞……二十五枚

峽谷交通網及里程概要

峽谷ノ里程ハ愛本橋ヨリ起算ス

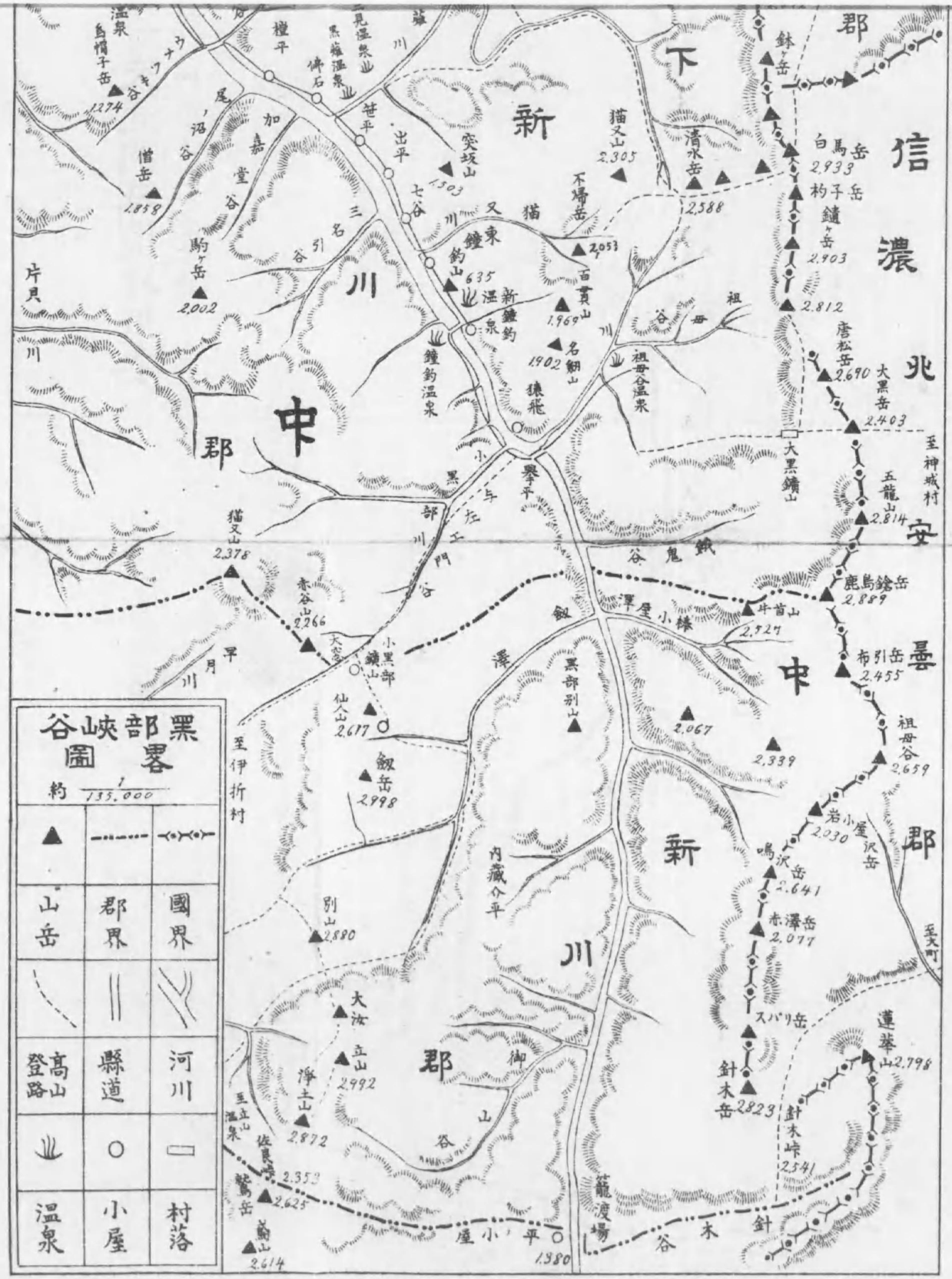




一　はしがき

飛越國境の穂高、槍ヶ岳から北に連續せる一大**ルプス**を以て呼ばれてゐるもので、我越中の國境である。一は信州との國境をなせる白馬山脈で、北走に至り、親不知の附近で日本海に沒頭してゐる。ど併走せる立山山脈である。

此兩山脈の間に發育せる縱谷は、我黒部川の一約二十里、東西約八里、年が年中消ゆる事なき萬けて、白樺や栂の下蔭を潜り拔けて、流れ合ふ八れが次第に集り落合うては、片麻花崗岩の岩脚を鳴り、流れ流れて愛本に出で、初めて平原の空氣其間至る處懸崖高く聳え、斷崖深く削られ、到



一　はしがき

飛越國境の穂高、槍ヶ岳から北に連續せる一大連山は、所謂**日本アルプス**を以て呼ばれてゐるもので、我越中の國境に入りて二派に岐れる。一は信州との國境をなせる白馬山脈で、北走して越中、越後の間に至り、親不知の附近で日本海に沒頭してゐる。今一は其西側に殆んど併走せる立山山脈である。

此兩山脈の間に發育せる縱谷は、我黑部川の一大峽谷である。南北約二十里、東西約八里、年が年中消ゆる事なき萬年雪の下に產聲を揚けて、白樺や栂の下蔭を潛り拔けて、流れ合ふ八千八谷の諸溪流。それが次第に集り落合うては、片麻花崗岩の岩脚を削り、岩に激し石に鳴り、流れ流れて愛本に出で、初めて平原の空氣に觸れてゐる。

其間至る處懸崖高く聳え、斷崖深く削られ、到底人跡の及ばぬ處が

一　はしがき

飛越國境の穗高、槍ヶ岳から北に連續せる一大連山は、所謂**日本アルプス**を以て呼ばれてゐるもので、我越中の國境に入りて二派に岐れる。一は信州との國境をなせる白馬山脈で、北走して越中、越後の間に至り、親不知の附近で日本海に沒頭してゐる。今一は其西側に殆んど併走せる立山山脈である。

此兩山脈の間に發育せる縱谷は、我黑部川の一大峽谷である。南北約二十里、東西約八里、年が年中消ゆる事なき萬年雪の下に產聲を揚けて、白樺や栂の下蔭を潛り拔けて、流れ合ふ八千八谷の諸溪流。それが次第に集り落合うては、片麻花崗岩の岩脚を削り、岩に激し石に鳴り、流れ流れて愛本に出で、初めて平原の空氣に觸れてゐる。

其間至る處懸崖高く聳え、斷崖深く削られ、到底人跡の及ばぬ處が

多い。古來黑部奥山を以て呼ばれて居た、其奇拔なる山容と、豪宕なる水態とは、黑部獨特の光景にして、天下多く其類型を見ない。

此間至る處に温泉の湧出するものあり、愛本、黑薙、鐘釣は云ふ迄もなく、祖母谷の如き、更に上流無人の靈境仙人谷に於ける花崗岩の窪みに湛ゆる、天然浴槽の如きは、殆んど世人の之を知る者がない。

愛本より祖母谷川落合に至る本流殆んど九里の間は、曩に黑部林道の開通以來行通の極めて平易なるものがあつた。而かもそれ以上本流の兩岸は、殆んど絶壁の連續にして、一歩も向ひ近づく事が出來無かつた。此間にありて東洋アルミナム會社の水電事業經營の爲め、次第に上流を探り、今や更に上流四里餘**棒小屋澤**に至る間に、歩道を見るに至つた。

更に交通路としては、富山市と大町とを連絡すべき**佐良＝針木線**ありて、立山の東面平ノ小屋附近に於て、黑部川を横斷するものあり。

省線三日市驛と信州北安曇郡糸魚川街道中の神城村とを連絡する**愛本＝大黑線**あり、本線は愛本より約九里の間黑部林道によりて黑部川の本流を櫟平まで溯り、祖母谷温泉を經て大黑より神城に達するものである。更に**佐良針木線**と**愛本＝大黑線**との連絡線卽ち**佐良＝猿飛線**ありて五色ヶ原、佐良、立山、劒岳、猿飛、鐘釣、祖母谷等との連絡を見るに至りたれば、黑部探勝としては今や殆んど遺憾なきに近しと云ふべきである。

恁くて從來殆んど夢想だにも及ばざりし、黑部の奥の神秘の境も、次第に開發せられて、世人をして、容易に探勝の機會を得しむるに至つたのである。

二　峡谷の探勝

夏の野を吾物顔の案山子哉

こは大正七年八月、時の縣知事井上孝哉氏が、黒部峡谷視察の際、愛本温泉の樓上に於て、同行の三由下新川郡書記の扇面に書き與へられし、途上吟の一であつた。

實にも案山子を羨む夏の眞盛り、草も木も打萎れて、蟬の鳴く音もさながら身内の膏を搾り出す樣に聞ゆる時、足一たび黒部峡谷に入らんか、白雲起り清泉湧く處、山容の奇、水態の變を極め、其の幽邃にして神祕的なる綠蔭の下、清涼の氣自ら全身を襲ふを感ずるであらう。乞ふ峡谷に於ける沿道の光景に就き、黒部探勝の一斑を語らしめよ。

省線三日市驛に下車し、直ちに同構内に待合せる、黒部鐵道の電車に乘移る、涼風徐に吹く綠田の間を輕快に走つて、いつしか東三日市、荻生、舌山などの各驛を過ぎ、浦山を發すれば左手遙に一條の大河原の横はるを見る、是れ余等の訪はんとする黒部川の勇姿である。それより終點下立停留場に下車し、坦々たる縣道を行くこと約七町（三日市驛より約四十分を要す）にして愈々黒部峡谷の關門として、往時天下三奇橋の一に數へられし、愛本橋畔の人となるのである。

泊驛に下車し、舟見町を經て愛本橋に至るも黒部探勝經路の一である。同驛より舟見町まで約二里の間定時自動車も通すれば、貸自動車もある。舟見町愛本橋間は約二十五町徒歩三十分にて達す、又舟見町下立口驛間の自動車連絡もある。

黒部探勝要路に當る黒部鐵道は、第一線として三日市、下立間（六哩二十鎖）を昨大正十一年十一月より開通し、第二期線たる下立、宇奈月間（四哩二十鎖）は目下工事中であつて、本年十月より電車を運轉する計畫である、蓋し黒部探勝者にとりては大なる福音たるを失はない。

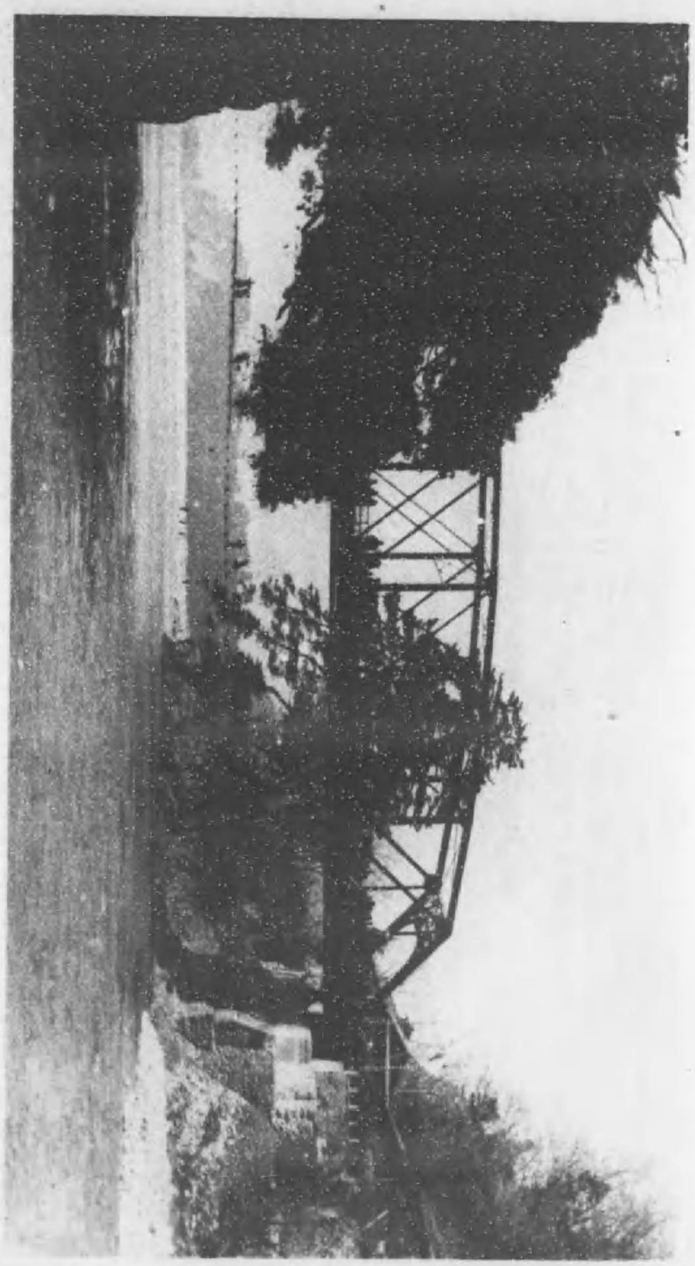
（一）愛本より黒薙まで

愛本橋　信飛越三國の間に源を發して山嶽重疊たる間を奔流し、到る處豪壯無比の峽谷を成して、恣に水態の景趣を極めたる黑部川の、初めて平野に接するは、此の**愛本**の地である。

橋は今鐵橋に架換せられ、巧妙卓拔なる往時木造の面影を見る事は出來ないが、然し峰巒高く兩岸に聳え、懸崖百尺虹の如く架せられたるは、眞に峽中の一偉觀である。

橋の由來は、今より二百六十餘年前、一世の名君加賀松雲公が、寛永元年歳十九の時、初めて其の封地たる越中を巡りし際、黑部川の屢々汎濫して、行旅を窘ましむることの多きを聞き、國を守るは必ずしも山河の嶮にあらずとなし、群臣其の要害を失ふを以て、切に之を諫止せしも、聽かず、其の臣笹川正房をして、設計監督の任に當らしめ、沿岸適當の地を相して遂に架橋の工を起し、河中橋脚を建つべき樣なければ兩岸より大木を反出して、中央に工合柱を造り、巧妙卓拔なる工法によりて、翌二年一大棧橋を竣成するに至つた。名を命して愛本橋と稱へられたるは、抑も本橋の起原である。（此の地元相本と稱せらる）

其の橋の名を、愛本とせられたるが如き、近傍に村落を設けて、世人の利便を圖られたるが如き、民を愛し、公益を進められたる、公の意のある所を窺ふ事が出來る。



橋　本　愛

其の後損傷ある毎に修補を加へ、明治二十三年の架換には、往時の構造を變改したる木橋と爲し、更に大正九年四月、現今の鐵橋に改められ、全く當時の面影を失ふに至つたのである。

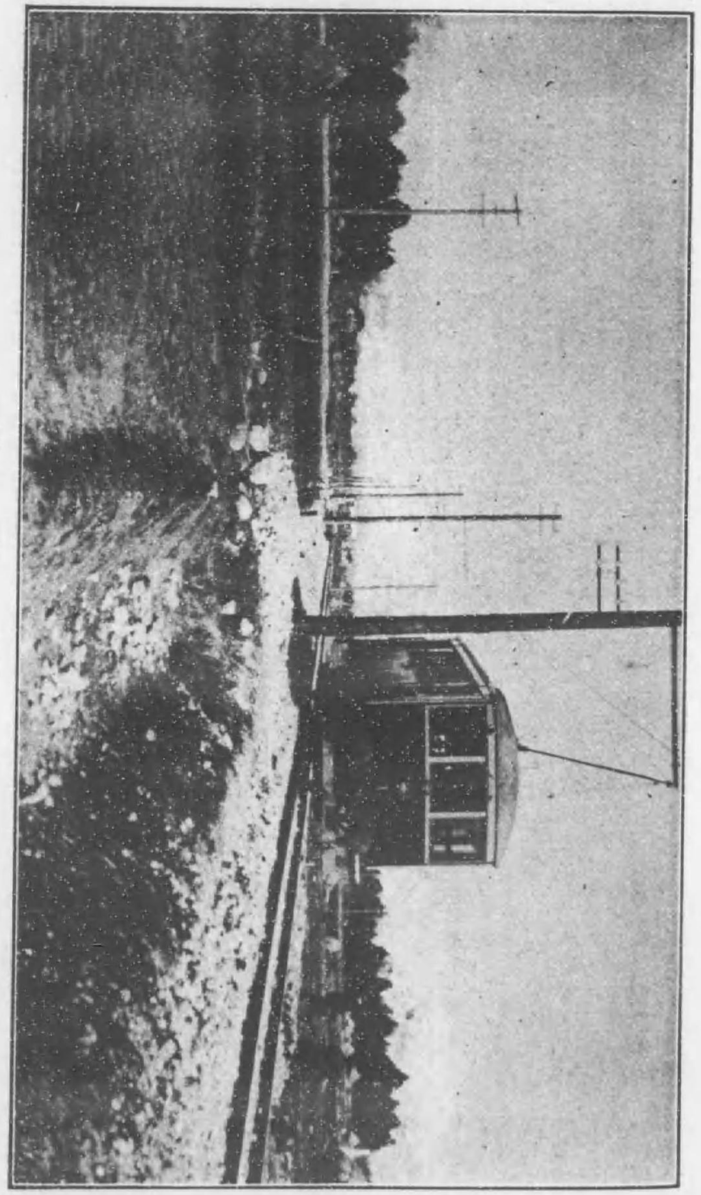
其の兩岸相逼れるあたり滔々たる激流は、奔龍の如く岩脚に激して、凄まじい唸を立てゝゐる。濃藍の深潭に湧き返へる水は、無數の渦を描きて、下流へ押されて行く。樹も水も、すべてが濃綠の中に、雪華の如く飛沫の散るのも、一種の美觀である。

東西の一帶は、立山及白馬の餘脈、嚴として天空に聳え、其の威容の雄大奇拔なる、眞に峽谷獨特の景觀である。更に西北を展望すれば、橋下扇面狀に展開せる黑部の奔流は、一望渺茫たる大平野を二分して、其の曠漠たる白い河原に、數條の綠線を描いて、遠く富山灣の滄溟に落ち行くのは、所謂黑部四十八瀨の壯觀である。

愛本橋畔に峽谷探勝の第一歩を踏み入れて坦々たる縣道を內山村へと進む。約十五町にして村を離れ、尙行くこと八町許りにして、右手

に當り結昌片岩の岩壁の間に、一の飛瀑を見る、所謂**大瀧**である。是より黒部の清瀨を左に見て、段丘の平地に沿ひ次第に峽谷を遡る。

内山村より約半里にして、上流宇奈月平へ移轉計畫ある**愛本温泉場**(目下休湯中)に着く。是より分銅谷、宇奈月谷を經て近き將來に文化的發展の見込ある、**宇奈月平**に出る。前方段丘の間に點在する幾十の建物は、本峽谷に於て**二十萬キロ**の、水力電氣事業を計畫しつゝある、**東洋アルミナム株式會社**の**黒部川出張所**と附屬社宅がそれである、黒部鐵道は本年十月此地を終點として開通される、又目下樋管修繕中なる愛本温泉は遲くも明春迄に移轉するであらう、斯くなれば旅館、公衆浴場、貸別莊など續々建築せられて、黒部の奥の靜寂の境に、**一大遊覽地**を形成し、初夏新緑の候より、紅葉錦に照り輝く晩秋に至るまで一日の清遊を試みるもの、又は悠々數日の浴客など入交りて、不斷の盛況を呈するは疑なきことであらう。



黒部鐵道

宇宙月ス キ ー ノ 場

東洋アルミナム株式會社黒部川出張所

佛石附近の谿流

宇奈月平はスキイ場としても、地方に得難き適地である、されは東洋アルミナム並に黒部鐵道會社員等を始とし、毎年三月中旬頃迄盛に練習が行はれて居る、本年黒部鐵道全通の曉は一層盛賑を極める事であらう。

是より黒部本流に架したる、第一の吊橋を渡りて右岸に移る。道路は黒部國有林の爲に開かれたる、六尺幅の林道となる、河域は愈兩岸の峰巒に壓せられて、峽谷獨特の光景を現はして來る、片麻岩の斷涯を、切り開いた片山路、黒水は右なる岩脚に激して不斷の唸りを立てゝゐる。吊橋より二十町位にして**宗左衞門茶屋**に着く、其の對岸に、一條の等高線を劃して居るは、有名なる**十二貫野用水**である、天保年間に於て本郡松倉村大熊の産**椎名道三**加賀藩主の命を受け延長六里に餘る崛曲せる山腹を穿鑿して竣工したのである、今岩壁を切り開いた跡を見ると、當時中々の難工事であつた事が想像される。尙行くこと十町位で**佛石**の茶屋に着く、茶屋の後方なる岩壁上には、佛陀の形に酷似せる、一の自然石がある、其の邊には杉の巨幹があつて、房々と

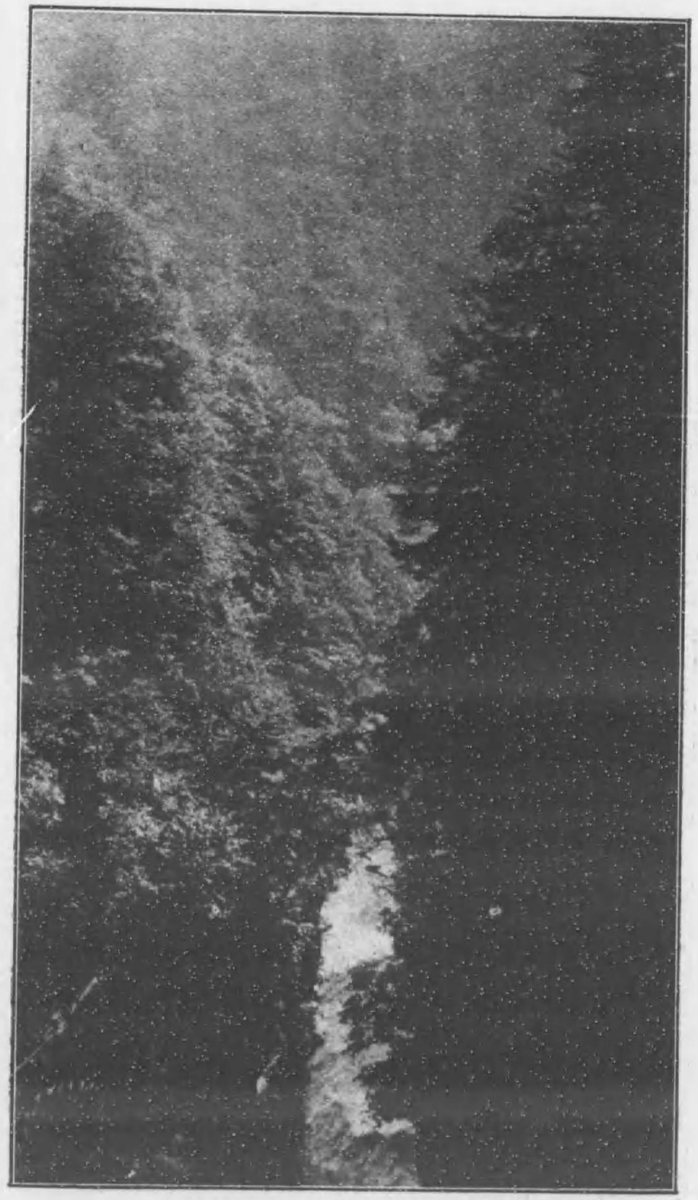
した大きな葉を擴げて、人待顔に自然の天幕を張つてゐる。

國有林地帶　佛石を過ぎて、對岸を見ると、加嘉堂連山の急峻な絶崖の間に、濶葉樹の鬱蒼たるを見る。水は上流一帶綠樹の隧道を拔けて來る、是より山水の景趣全く一變する。

左方突兀として、天際に聳ゆるは**森石山**（一、一〇六米）の峻峰である、大正六年黑部峽谷に於て、試驗射擊の行はれし際、此の峻嶺の絶頂に標的を据へ、八〇〇米四十度以上の仰角度にて、對岸の河原より射擊したのである、所謂飛行機射擊とは是である。

森石谷の深い支溪を辿ると、此には花崗岩の眞白い岩壁に懸れる、一大飛瀑がある、卽ち**森石の瀧**である。對岸の加嘉堂谷と森石谷とは、民有地と國有地との境界であつて、山容全く變つてゐる、民有林は多年濫伐に委して、殆んど禿山の樣であるが、天然造林による國有林は翠色滴らん許りの美觀である、此の麗はしき山容は餓えたる行人の眼

森石の瀑



黒薙川の後引

に、尠からぬ快感を與ふるのであらう。

森石谷の木橋を越え、五味平の植林地に入る、晝も小暗き、杉の下路を潜りて、二十町許行くと、黒部本流と黒薙川との落合に着く。此にて林道は二つに岐れて居る、左方の小逕は、黒薙川の林道で、黒薙温泉へは此から約十五町である。

黒薙川の右岸なる、岩壁を切り開いた、細い林道を辿ると、一抱に餘る山毛欅や、小楢、楓、など打繁れる喬木林の下蔭、夏の日光の威力も、此茂みの葉をば透し得無い、冷やりとした、薄氣味の惡い程、冷たい空氣の中に、苔の匂が何處ともなく漂ふ、此密林を透して見る時、太き細き樹層の美觀は、尠からぬ快感を與へる。

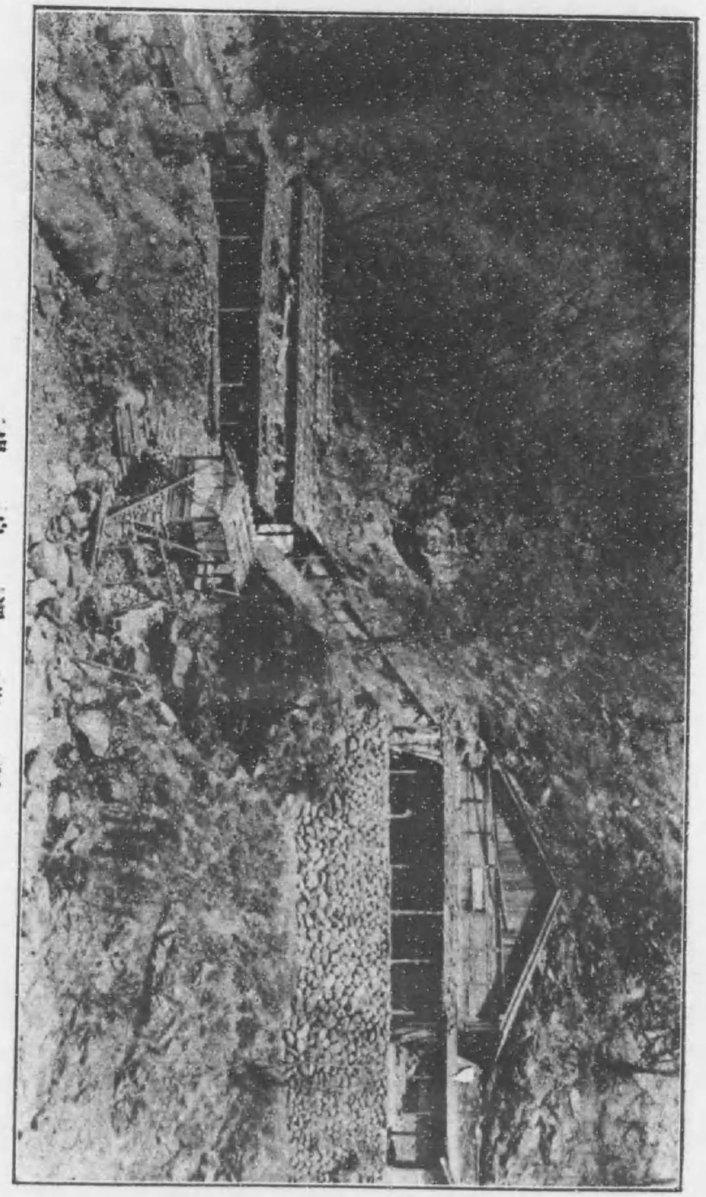
右側は急に打壞けて、藍よりも色濃き、黒薙川の流が、脚下の深い溪谷を拔けてゐる、其の下方に見える虹の樣に横はれる長橋は、黒薙川の吊橋である。

暫し佇みて、此黒薙川が絶壁の下を流れて、黒部の本流に落合ふあたりを顧みると、薄緑の楓、山毛欅、濃緑と云ふよりも寧ろ黒すみたる栂の梢、葉の上に更に他の幹が見えて、其上に次の根があるのだ、其層々として茂れる枝の戰ぎ、葉のさゝやき、其間に見ゆる、暗褐色の岩壁には、淡紫色のタマアヂサヰや、ギバウシ、淡紅の麝香草等の間に、萩の花か咲き撓んでゐる。

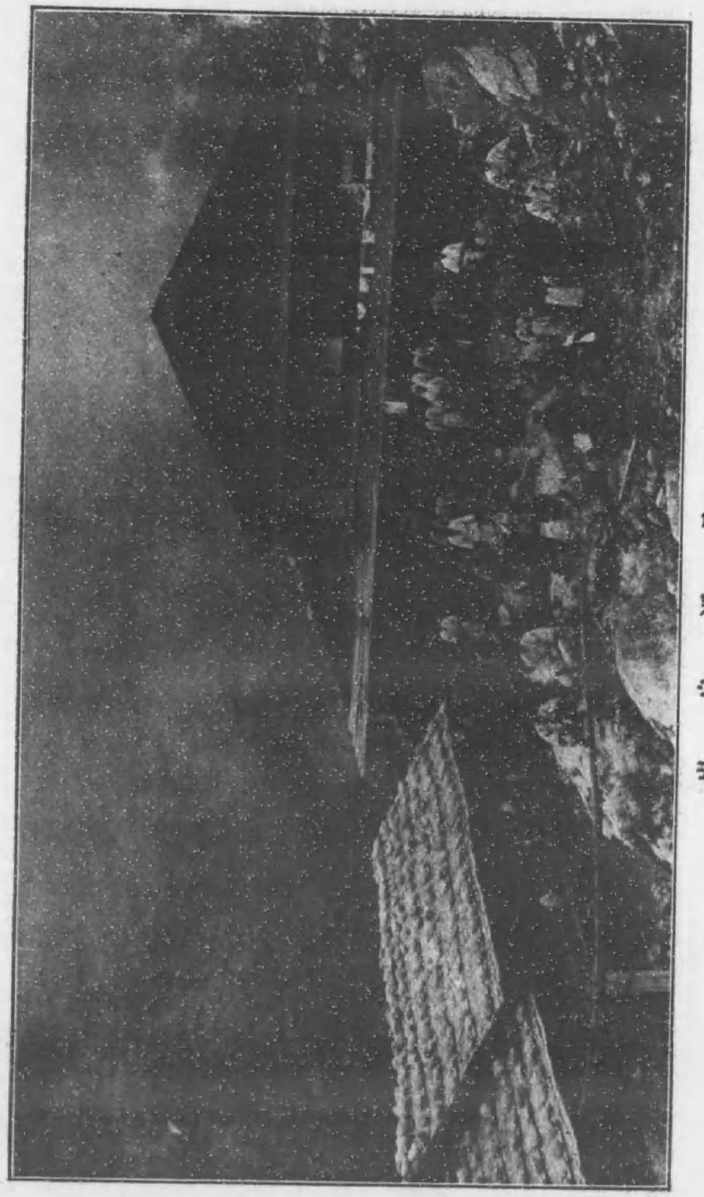
恁くて同じ樣な片山路を、同じ樣に進む、黒薙川の**あと引き**と云ふ有名なる溪流は此下にあるのだ、兩崖相逼り、側立千仞の下、打茂れる綠葉の隧道を、綠磐を溶かした樣な濃綠の水が、音をも揚げずに流れて行く。

稍行きて右手へ下る、白煙の濛々たるあたり、數棟の建物の見えるのは、黒部温泉會社の經營に係る黒薙の温泉場である。

黒薙温泉　屏風を立て廻はした樣な鷄冠山(突坂山)の餘脈が前面に



黒薙温泉



見温泉場

立はだかつて、黑薙川の奔流が其岸脚に咆吼して居る。其の右岸深造岩の間より湧出する鹽類泉卽ち之である。

本泉は、後光明天皇の御宇、正保二年(紀元二、三〇五年)音澤村の住民太郎左衞門なる者の發見に係ると謂ふ。當時既に諸病に効驗あるを知られてゐたが、地嶮岨にして一般世人の來浴に適せなかつた。嘉永元年三月音澤村まで引湯に就きて通樋目立方を藩主より命ぜられたけれども、工費過分の爲め遂に成らなかつた。其の後幾多の變遷を經て音澤村の佐々木孝次郎氏溫泉主となり、苦辛經營して設備の改善に努め來たのであるが、大正十一年より黑部溫泉會社の所有となり、一見溫泉及愛本溫泉と共に、今後設備等を一新せんとする計畫中である。

溫泉場は右岸に沿ふて、高低數段の地を打開きたる間に設けられ、數棟の客舍と河域に近く二棟の浴場が建てられてある。其處には數個の大浴槽があつて、碧瑠璃の樣な靈泉が湛へられてゐる。

對岸の翠巒は近く軒を壓して、嵐氣の人に迫るものがある。其の懸崖には數知れぬ大小の飛瀑が斷續して濶葉樹林の間に懸つてゐる、所謂湯霧の瀑である。

此地深山幽谷の事とて、青山白雲遠く人寰を隔て、夏季の悠遊に最も適して居る、されば夏秋の候浴客常に絶ゆる事が無い。稍々上流に一の飛瀑あり直下六丈附近頗る景趣に富んでゐる。

本泉の成分及醫治効能を抄録すれは左の通りである。

黒薙温泉化學的成分

炭酸加留叟謨、硫酸留加叟謨、硅酸、硫酸麻倔涅叟謨、遊離炭酸

同醫治効能

神經衰弱、各種慢性僂麻質斯及ひ假性關節強直、婦人生殖器の慢性諸病、腺病、慢性痛風、慢性腸胃加答兒(疝痛留飲)、中風依卜昆垤里、貧血諸病、瘻瘡遲鈍性の創傷

二見温泉　黒薙の林道を黒薙温泉へ岐れずに眞直ぐに行くこと約五町にして達する。泉源は上流二見岩附近に湧出するものである。

本温泉は二十餘年前より、本郡下立村草野武平氏の經營に係る。初め黒薙橋の稍上流、霞瀑の對岸に温泉場を設け、上流二見より始んど一里の間引湯によりて經營せしが偶明治四十五年の大洪水の爲め流失の不幸に遭ひ、其後更に苦辛經營の上今の地を卜し再び同人に依りて經營せしが、去る大正六年愛本温泉の創立と共に同會社の所有となり、大正十一年更に黒部温泉會社の手に移り、黒薙温泉と共に開湯中である。

此附近遊覽地として、頗る景勝の地に富んで居る。殊に瘤杉谷附近の紅葉の美觀の如きは、他に多く其比を見無い。

本温泉の成分及醫治効能を抄録すれば左の通りである。

二見温泉分析表

無色澄明、稍甘味にして微に硫化水素臭を有し、弱アルカリ性あり。比重攝氏十五度に於て一・〇〇〇四、其の千分中固形物總量〇・四九六四分にして、定量分析の成績に據れは、本泉は弱鹽類泉に屬する。

同上醫治効能

慢性胃加答兒、慢性腸加答兒、腸弛緩症、常習便秘、腸疝痛、脂肪過多症、肝臟充血、上衝病、慢性咽喉頭加答兒、腺病、炎病後の慢性滲出物(慢性肋膜炎、慢性子宮周圍結締織炎等)、慢性僂麻質斯、慢性婦人生殖器病、乾癬、苔癬、鱗癬、其他慢性濕疹

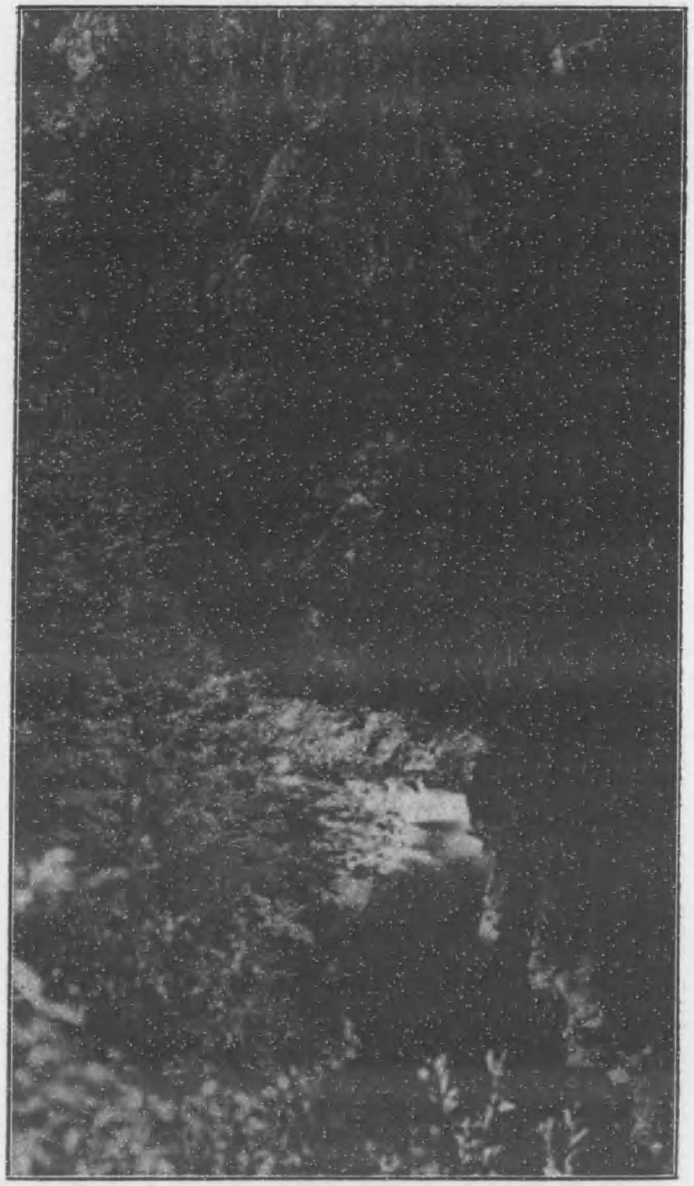
(二)　黒薙より鐘釣まで

黒薙橋附近　黒薙川の林道を後戻りして、元の分岐点より坂を下ると、黒薙川の吊橋に出る。橋の中央に止まりて、黒部本流と黒薙の兩

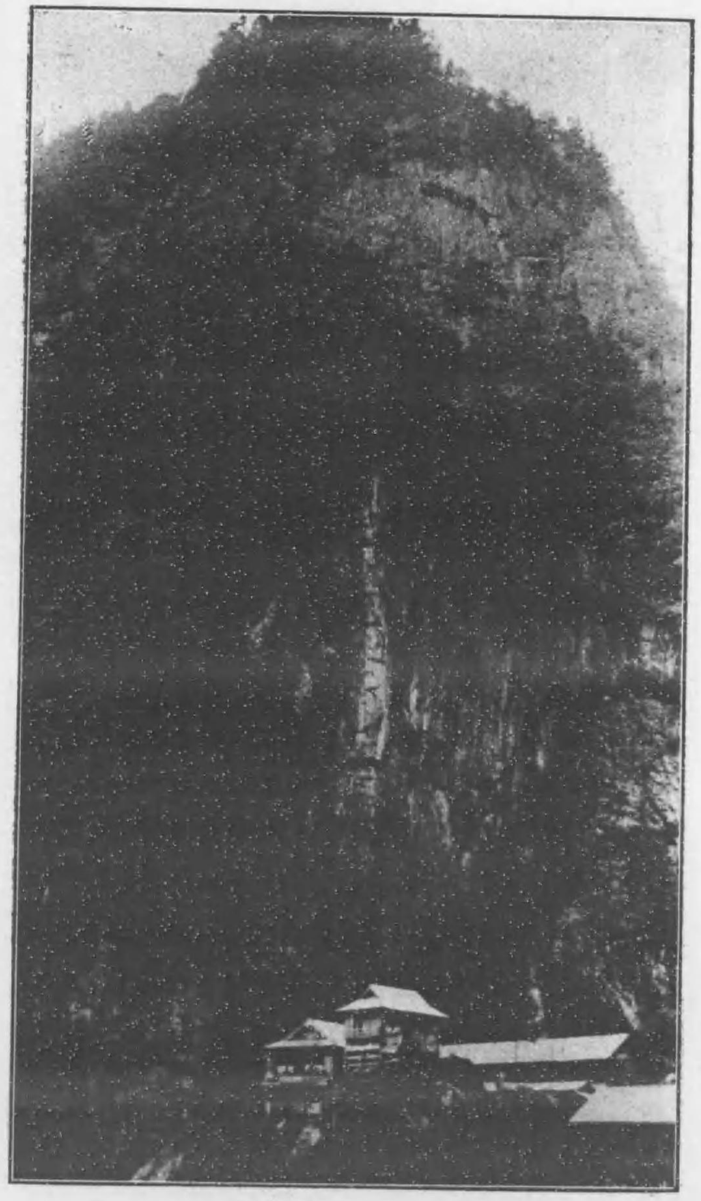
川が、凄まし い唸を立てゝ、落合ふ光景を見る、綺麗な濃藍の色を呈した水が、對岸の岩脚に激しては、深淵に渦卷をなして流れ行く、空には愛本温泉の湯樋が虹の様に懸つてゐる、人工と自然との對照が面白い。

橋を渡りて暫し黑部本流と別れ、黑薙川の左岸を辿る、平坦なる**笹平**の植林地を越えて、また黑部本流の右岸に出る、對岸は加嘉堂の連嶺で、絶壁の間翠色滴らん許りである。黑部の奔流は其の山脚に激しては絶えず白沫を飛ばして居る。

七谷越　更に進みて**だし平**を經て、**七谷越**に向ふ、試みに脚下を窺ふと、數百尺の絶壁、殆んど一物をも止めない、僅かに栂、山毛欅等老幹の岩角を領する許り。幾重の山を拔けて來た黑部の本流は、城壁の様な加嘉堂の連嶺**サンナビキ**の絶崖と、七谷の岩壁とに西と東から逼られて、右に折れ左に回り、湲々として來り、灑々として行く。兩



七谷越の谿流



東鐘釣山下の新鐘釣温泉場

岸から突出た花崗岩に激しては、雪の如く、或時は藍よりも濃き深淵を成して、崕樹を倒に宿してゐる。岫を出でゝ遊ぶ閑雲は、或は解けつ、或は結ぶ、山容水態、樹勢雲影、次第に黒部式を發揮して來る。花崗岩を半月形に切り開いた林道を、幾たびか右に曲り左に折れ、行き〳〵て**猫又**に着く。黒薙の岐れより約二里、此地低平の間、諸所に杉の植林を見る、是より新鐘釣温泉へ約三十町である。

東鐘釣山　七谷越に於て、遙前方に頭角を現せる東鐘釣山は、次第次第に近き來り、貉谷、小便谷を經て軈て其の麓に着く、全山一塊の巨巖より成り、形梵鐘の如く嚴として高く雲際に聳ゆる雄姿は、眞に峽谷中の一偉觀である。其の麓を迂廻し間もなく鐘釣の吊橋に出る、兩崕相迫る處激流其の岩脚に咆哮して、山鳴り、谷響く。

東鐘釣山の背後に、宏壯なる建物の見ゆるものは**新鐘釣温泉場**である。**鐘釣温泉場**へは吊橋を渡り、左岸の石灰岩の切開や、喬木の下蔭

を行くこと約五町にして達する。

新鐘釣温泉　黑部本流の河域、花崗岩の罅隙より迸出する鹽類泉である。水車に依りて高く汲み揚げられた靈泉は、樋にて對岸の浴場へ導かれて居る。

本泉は元舟見町高畠榮次郎氏の經營に依り開湯せしが、大正元年七月の洪水により客舍浴湯等を流失して、一時營業中止となり、其の後魚津町三和竹二氏の所有に移りて、大正五年より再び開湯せられて居る。

温泉場は、東鐘釣山の岩脚を切り開きて、二棟の客舍を河域に近く建てられてある。浴場内には四個の浴槽ありて温度一樣で無ければ各適度に浴する事が出來る。近年浴客の増加と共に、設備改善の必要を感じ、近く自家用電力の發生及客舍の増築に着手せむとする計畫中である。

此附近一帶濶葉樹と針葉樹が立雜りて、山水の景趣自ら凡ならず、誠に幽邃閑雅の一勝區たるを失はない。

本温泉の成分及醫治効能を抄錄すれば左の通りである。

無色澄明にして微に塩味を有す。

温度は攝氏七十四度半

成分

格替兒、硫酸、硅酸

効能

胃腸病、腦病、神經病に特効あり。

鐘釣温泉　黑部本流の左岸西鐘釣山の麓、花崗岩と接觸する石灰岩の間より湧出する炭酸泉である。別に浴舍の設けが無い、湧き出づる靈泉を其の儘岩窟の間に導いて、自然の大浴槽を成して居る、河水の漲涸に依つて、或は高きより流れ出で、又は砂中に湧く、其の湧出量の多き事と、泉質の玲瓏にして快味ある事は本泉の誇りである。

増補大路水經には、文政二年(紀元二四七九年)栃山村孫右衞門等鐘釣温泉開湯云々とあり。其後幾多の變遷あり、文久元年(紀元二五二一年)に至り、片貝谷村字島尻伊藤刑部氏の所有に係り開湯せしが、明治十一年九月に至り、富山市大間知正助氏の手に入り今に繼續してゐる。其始片貝谷より往來せしも、峻坂高嶺通過容易ではなかつた。明治

二十年頃に至り、音澤村より黒部川に沿ひ通路開けたれども、尙橋梁の設備不完全の爲め、浴客の不便は尠くはなかつた。

其後國有林の林道開通するに至り、老幼男女の通行容易となり、加ふるに近年に至り客舍の改築等あり、食品等の設備亦漸く備ふるに至れるを以つて、夏季毎に浴客充滿して此空谷を賑はして居る。

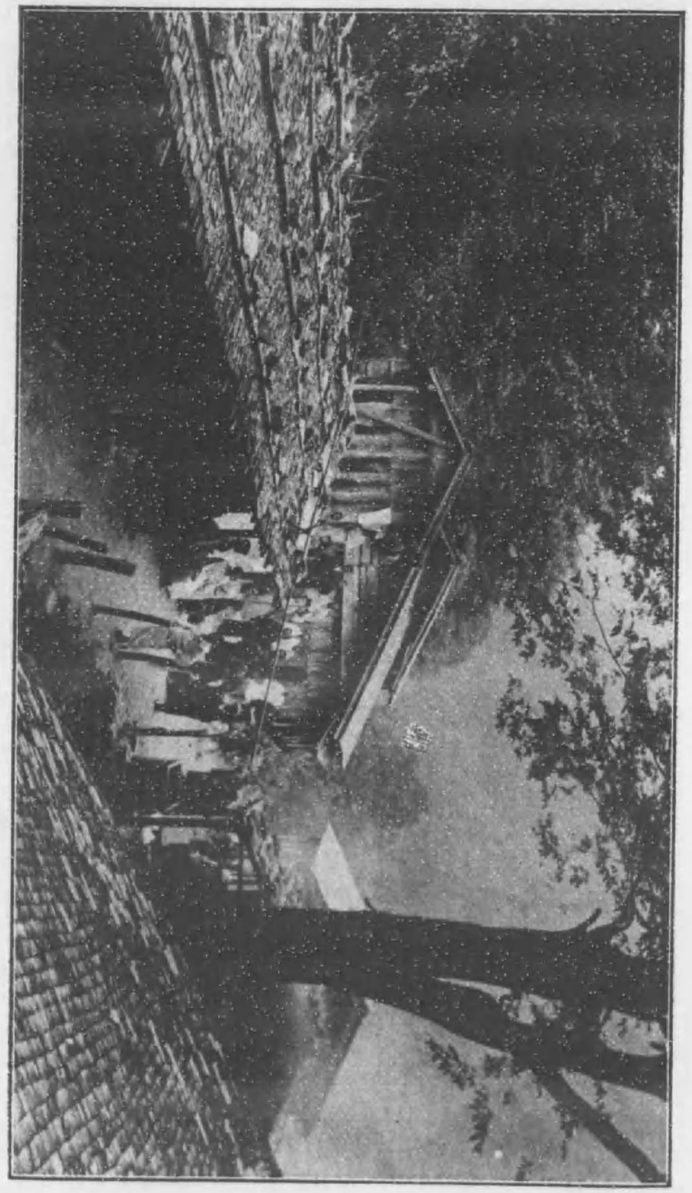
客舍は林道の左右に並び、長屋式の自炊貸間の外に、新築された客間が數室ある。温泉場へは二百尺に餘る石段を下る。其の岩窟の浴槽底は勿論砂礫である。如何にも原始的な處に言ふべからざる趣がある。

靈泉に身を浸し乍ら、空を仰ぐと岩上に覆ひ被ふさるゝ濶葉の蔭から紺碧の空が僅に見透される。前には黒部の清瀨を隔てゝ百貫の嶮峭が、巖として天空を衝き、直に面を掠めて立つ。幽邃にして清絕、眞に脫俗の靈境である。

本温泉の成分及醫治効能を抄錄すれば左の通りである。

成分

食塩、硫酸加里、硫酸曹達、炭酸石灰、炭酸曹達、炭酸苦土、炭酸亞酸化鐵、硅酸



百貫山下の急流

礬土、硼酸

醫治効能

痛風、傴麻質斯、諸關節病、佝僂病、胃病、留飲、嘈囃、呑酸、胃弱、便秘、疝痛、慢性肝臓病、黄疸、門脉充血、腹水、膽石、痔疾、慢性膀胱病、淋病、子宮病、腦病

百貫山　鐘釣温泉場の對岸は、峻嶺高く天際に聳え、斷崖側立削るが如き壯觀を呈して居る、これ嘗て飛行機射撃演習地たりし百貫山（一・九六九米）の雄峻である。此飛行機射撃（普通試驗射撃と稱す）の實施せられたのは、去る大正六年と、同九年の二回で、當時の談に依れば、百貫山は空中射撃として、全國稀に見る適地であるとの事であつた。地形は第一要件ではあるが、將卒の宿舍設備と、彈藥等運搬の利便を缺くと資格がない。此点より見て、林道あり、温泉場あり、其の上山形がよい、總ての要件を具備して居るのは此の地であるとのことであつた。

此の飛行機射撃と云ふは、三十度乃至六十度位の仰角度にて、飛行機を撃つ試驗を行

ふのである、普通飛行機は、八百乃至千二百米の上空を飛行する、故に此射撃試驗には、それ位の距離と、相當の角度が必要となるのである、百貫山は此要件を具備して居る最良の地形で、其頂上に(勿論絶頂では無い前面より見たる絶壁の端である)十二米四方の標的を備へそれに向つて、温泉場附近の河原と西鐘釣山の中腹二箇所で發射したのである、百貫山と西鐘釣山は黒部の本流を挾んでV字形を成して居るから、此三箇所何れから撃つも、標的迄は同距離である、即ち地形上得難いのは是である。

此試驗射撃の行はれたるは**百貫山**、**森石山**と**だし平**の三ヶ所である。

但し**だし平**は平面射撃の試驗地であつた。

(三)　鐘釣より祖母谷まで

鐘釣の吊橋より、林道は半減して三尺幅の歩道となる。今までの様に平坦ではない。谿谷は愈迫て兩崖の峭壁益々急峻となる。V字形の上流式景觀、名にし負ふ黒部の峡谷。是より愈々奇拔の度を加ふ。

白き花崗岩の岩脚を洗ふて流るゝ水は、岩に狂ひて　萬丈の白沫を崖樹に濺ぎ、淡紫色のギバウシ、黄色の白山オミナベシ、淡紅な萩等が、それ毎にしぶきに咽んでゐる。**カラ谷**を過ぎて**與平**に來ると、畫

與平附近の谿流

も暗き許りに天に覆ふ桂の巨幹、其間に立雜る山毛欅の老木、夜の間に凝結せられた葉末の滴は、ぽたりぽたり帽子を打つ。深山の氣分を味はへと許りに。**ウド谷**、**カゲの谷**に向ふと、もう姫子松、栂、椴の針葉樹が、直下千尺の峽谷へ、其剛直な幹や枝を突き出して居る。其の黑み勝の針葉樹を通して、ブナや檜や欅の濶葉樹が其間に混じて居る。それが黑部式の斷崖の間に交錯して居て、其千餘尺の脚下には、奔龍の如き溪水が、花崗岩壁に激越して、唸りを立てゝゐる。

對岸は**銘劍**の斷崖、今し眠から醒めた樣な白霧が徂徠してゐる、上流の方を見ると**欅平**の山頂が針を列ねた樣な針葉樹を被ふつて、嚴めしく突立つてゐる。行き行きて右に廻ると、**小黑部川**が西より落合ふて來る。兩崖の山脚相迫る處深山式の丸太を配つた吊橋がある。橋を越えて可なり急な坂路を登る、此處には磊々たる岩塊が路の左右に錯雜して、其間に五七本の山毛欅が廣大なる區域に其の枝を擴げて、此

谿間の下草をかくまつてゐる。右側を見ると、山腹の間に小黒部川を溯りて**劍山**、**立山**方面に登る逕路がある、此逕路は元小黒部礦山の爲めに設けられたものである、大正十年八月、朝香宮殿下は、信濃方面より**立山**、**劍山**等を登攀せられて御歸途黒部峡谷を御通過になつたのは、此小黒部の山道であつた。

小黒部山　試みに路を右に取つて、暫し小黒部山の脊梁を探つて見る。奇麗に掃き清められた、庭園内の築山でも登る樣な感じがする。杉苔に包まれた。寧ろ圓みのある岩石の足場、又は切株の間を一足づつ拾ふて行く。**欅平**から**小黒部**の右岸の崛起せる一帶の連嶺。＝それは遠く**劍山**の直ぐ附近まで連れる尾根＝を辿る。今其頂上へと南西の方向を指して、横卷に進むのである。約三十分にして尾根に出る。

姫子松や栂の落葉と、杉苔の堆積したふつくりと柔かい布團の樣な路である。勿論天地の創始以來、轍の跡や、馬の蹄などに、汚された事の無い新しい路。間もなく尾根に出る。これから尾根を次第に登る。坂と云ふ程では無い、巨岩の門の樣に峙てる間を潜り拔けて前面を見ると姫子松と栂の大森林がある。其灰白色の樹層には、地圖苔や兜苔が喰附ついてゐる。それがすつきりとした、飽くまでも淨い空氣の中に際立つて見える。通り過ぎて少し高くより顧ると、浮き立つた樹層の色と、光澤に富んだ濃綠の針葉とは、一層其の特性を發揮して來る。更に遠く此幽邃なる雰圍氣を透して、東に**欅平**附近の翠色を眺め、西に**小黒部**の溪谷を望む時、其深い深いどん底からは、溪流の響が空氣の動搖につれて、或は遠く、或は近く聞えて來る。深山の氣分と、情緒とが今更の如く胸底を打つを禁ずる事が出來無い。

恁くて最高點に達すると、栂と欅が立並んで、其枝には薄淺黃色のサルヲガセが、徂徠する霧の裡に漂うて居る。左方**欅平**附近の谿谷を隔てゝ、**祖母谷**、**奥鐘**方面の脊梁に並列せる針葉樹の、谿間より立騰

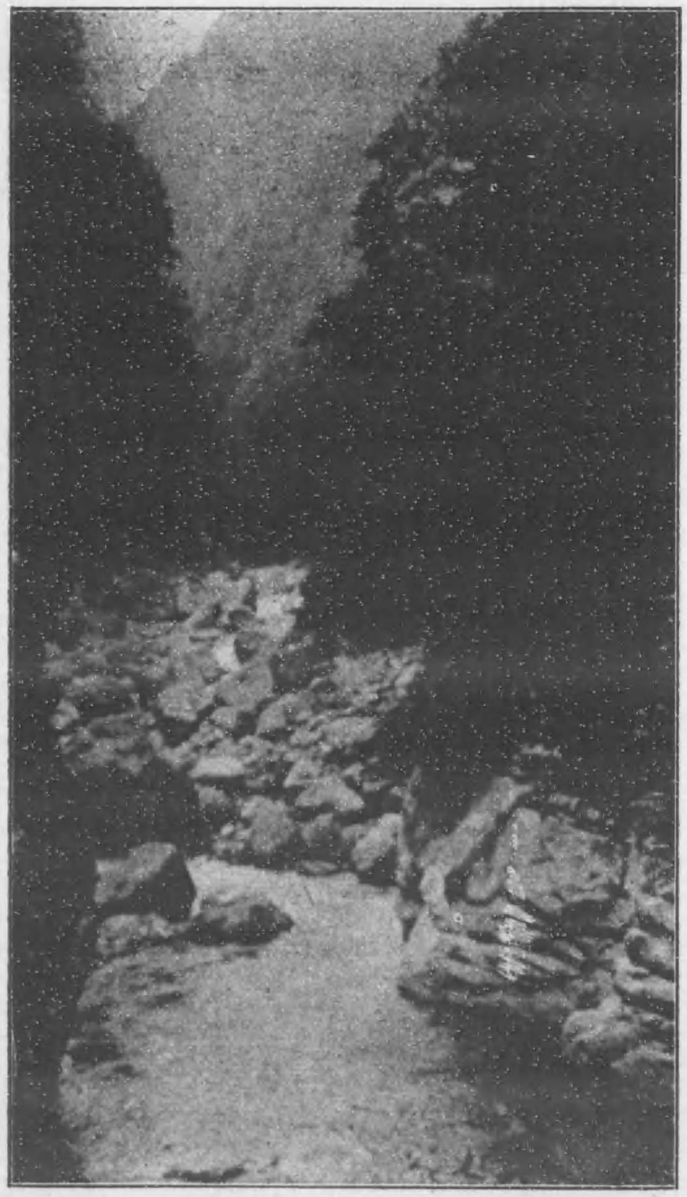
る狹霧の爲めに、うすぼんやりと見えつ又隱れつする樣は、實にいゝ。せめては鐘釣溫泉の浴客などは、此邊まで辿り來て、此神祕的な、深山特有の氣分と情緒とを味つて欲しい。

これより元の林道へと降る、更に急坂を登り詰めて又黑部の本流に向ふ。**山毛欅**、楓、欅などの下路を幾たびか曲折して下る。

猿飛　不歸岳より西南に走つて、百貫山となり、更に峻嶮比ひ尠き銘劍山の餘脈の走つて峽谷に迫る處、雨蝕風侵幾千年の間、自然の動力と戰つた花崗岩の岩骨が直截數千尺の絕壁をなし、其間に樹、姫子松、ネズコ等と共に石南、ナヽ、カマド等が僅に根を占めて居る。

暫し佇みて　下流を眺むる時、兩崖相迫る處、其の下方に濃藍の如き碧潭を見る。而かも其の幅僅に四五間、屏風の如く兩々立並へる岩壁の險路に湛へてゐる。音もなく動きも見えず、全く流れて居るとは思はれ無い。所謂**猿飛**の勝地之である。

流激の飛猿



祖母谷吊橋より上流を望む

賴山陽曾て耶馬溪に遊びし時、筆を投じて歎賞せしと聞く、彼の投筆の峰のそれの如き、絶景の連續せる黒部峽谷に於て、絶世の雄筆もなほ眞を盡し難きは、此**猿飛**の光景であらう。

猿飛　を左に見て峭壁の間に鑿たれたる一綫の林道を辿つて**櫸平**に向ふ。花崗岩の山脚が沸白萬石の水に洗はれて圓滑となり、純白を呈せる樣は、一見石灰岩と怪まれる。其間にコハウチハカヘデ、ナ、カマド等の垂れかゝれる樣は、實に比類がない。

霜信一たび至つて、滿溪の楓葉霜に飽く時、燃ゆるが如き紅葉の、白岩碧潭と相映發する樣は、想ふだに神飛ふを覺えるのである。

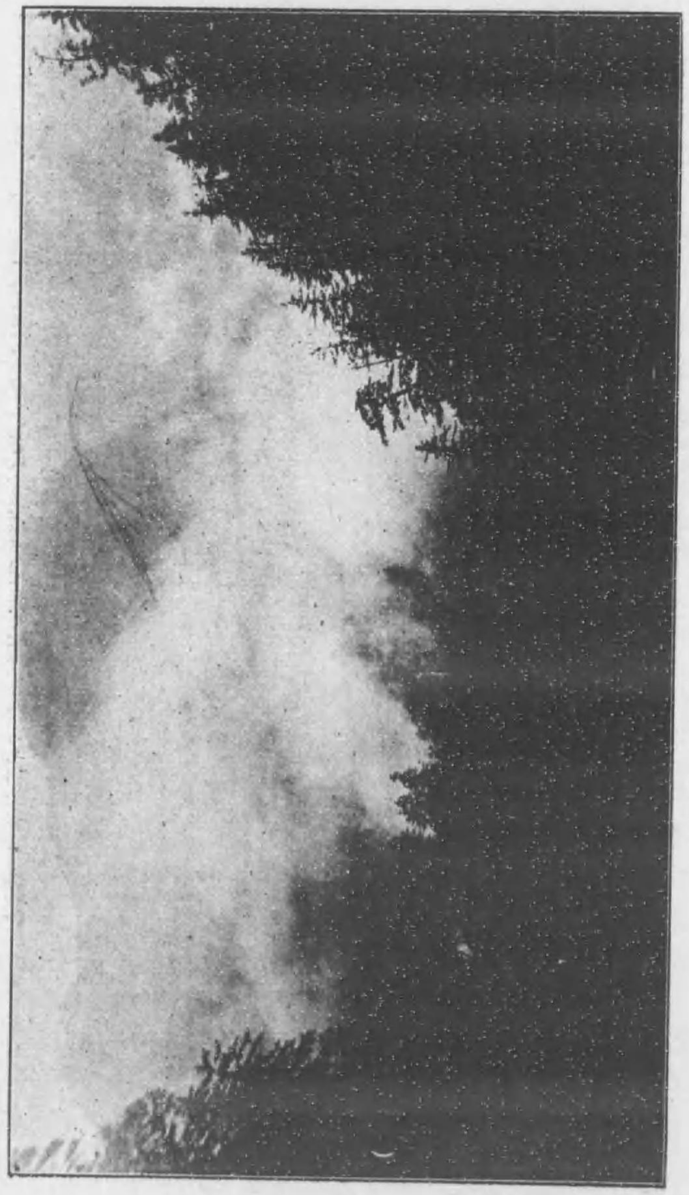
奥鐘山　櫸平より黒部上流の一帶は、到る處懸崖高く聳え、奔流岩脚に激越して、到底其の奥を極め難き、一大祕境に屬して居た、然るに東洋アルミナム株式會社は、近年水電事業計畫に伴ふ測量の爲め、上流棒小屋澤に到る約四里の步道を新設し、此神祕的峽谷の一部を開

いたのである。此歩道は林道より遙嶮惡にして、絶壁に渡しある一條の鐵線を命の綱と握り、或は數丈の藤梯子を幾つともなく登り詰め、又は一物を止めない岩壁面僅の切開に手足を掛けて、一足つゝ横行するなど到底普通人の歩ける程度のもので無い。蜆坂、**森本橋**（大正九年森本内務部長探嶮記念として命名せしもの）の嶮所を越へ櫸平より辿ること約三十町にして、軈て對岸に屏風を立て廻した様な一大絶壁を見る、有名なる**奥鐘**は卽ち是である、側立千尺削るが如き絶崖の數町に亙つて、鐵板の様な岩骨を現はして居るのは、所謂黑部上流式の景觀であつて、まことに豪宕雄大なるものである。

これより元の小逕を降り**櫸平**の林道へ戻る。

祖母谷温泉　櫸平に至り長き吊橋によりて、黑部の本流を右に離れて祖母谷川に就く。花崗岩の切開きたる歩道を辿り、萩薄の垂れかゝる間を過ぎて、一坂を越えると急に亞硫酸瓦斯の嗅が鼻を衝く、ふと

奥鐘の絶壁



祖母谷附近の針葉喬木林

前面を見ると、河域の間に一棟の屋根が見える、目下廢湯に爲つてゐる。**祖母谷温泉**である。

本泉は東から來る祖母谷川と、南から來る祖父谷川との落合の邊りに、攝氏百度の高温を保ちて湧出する硫黄泉である。

本温泉の始めて發見せられたるは、審ならざれども、此の地に硫瀛孔及熱泉の噴出ある事の知られたるは、比較的近年の事であつた。明治二十年の頃に至り、魚津町朝田新兵衛氏の有に歸し、同三十八年に至り、始めて本温泉の經營を見るに至つた。二棟の客舍は新築せられ、食品其他殆んど完備せられて居たものである。

此地に遊ばんもの、或は白馬岳や大黒方面に至らん者の爲めには、此上なき宿泊の便宜を與へてゐる。

此地海拔實に二千八百尺、空氣清涼にして、地幽邃なり、一昨年朝香宮殿下、此處に御宿營あらせられ、當時御入浴の榮譽を蒙りたる浴槽は、好個の記念として今尚此地に殘つてゐる。

本泉の性質及醫治効能を抄錄すれば左の通りである。

亞爾加里塩類泉、無色透明

醫治効能

僂麻質斯、神經衰弱、膀胱加答兒、腸胃諸病、肺結核及氣管支病、ヒステリー、ヒポコンデリー、皮膚諸病、筋痲痺、腹膜諸病、肋膜炎、痼痛、子宮諸病、脊髓諸病打撲、關節等運動不自由病

（四）峡谷の秋色

短い峡谷の夏が過ぎて、霜威一たび峡谷を襲ふ時、紅葉樹の種類に富んだ黒部の谿々は、濃淡深淺、各種の霜葉に彩られて、其の美觀は實に例へ様が無い。

十月の末又は十一月の初め、黒部峡谷に枕を曳きて、内山村より黒部川の左岸に沿ふて次第に溯ると、一里にして宇奈月谷の吊橋がある。それから右岸を辿るとヌルデ、カマウルシ、マユミ等の紅葉と、ダンカウバイ、クロモジ、ノリウツギ等の黄色せる雜木林の秋色を眺めつつ、行くこと約一里にして佛石の茶屋がある。山水の風光、一足毎に趣を加ふるであらう。更に十町許り行くと森石谷に向ふ。前面に打開けた濶葉樹の森林があつて、其の層々として頂上に續く紅葉の鮮麗な事、それが一株毎に劃然として、濃淡各種色を異にしてゐるのである。

黒部峡谷に於ける秋色の美觀は、實にこれからである、蓋是までは民有地に屬せる裸山で、殆んど見るべき森林が無かつたのであつた。淺紅色や黄褐色なるアカシデ、ミヅナラ等の巨幹の間に、濃紅色のハウチハカヘデ、ヤマモミヂ、コハウチハカヘデ等械樹科植物、及ミツバツヽジ、マユミ等の燃ゆるが如くなるが、ダンナウバイ、タニウツギ等の鮮黄色なると入り雜りて、眼前に展開した深谷から頂上まで打續いて居る、森石の一大飛瀑が其間に懸りて、純白な花崗岩の層を滑つて居るのが、栃の葉かくれに見える。

五味平の薄暗い杉の隧道を潜りて、黒薙温泉へ左に岐路に入る、見上ぐる尾根、見下ろす崖、眺むる對岸、其の鮮かな紅色に燃えたつ様は實に見事である。紅褐色なる楢、ブナ等の間に、濃紅色なるコハウ

チカヘデ、メグスリノキ、ヤマモミヂ、ハウチハカヘデ其の他カマツカ、南京ナ、カマド、ヒメウツギ、ネヂキ等紅葉の多い事、而してそれが南向に陽光を受けて居るから一層鮮かである。其の兩側より覆ひかゝる紅葉の隧道を過ぐる時、下から見上ぐると、透過光線によりて紅葉の組織まで透き徹つて、其の燃ゆる如き美觀は、側面から見る時反射光線によりて、吾等の目に入る者とは、自ら異なつた趣がある。

數百尺の斷崖の下を流るゝ黑薙川を瞰ると、黑薙橋アトヒキのあたり、淨瑩清絶な水の紅葉の隧道を穿ちて、流れ行く樣は實に美しい。

四五町行いて黑薙温泉に至り、碧瑠璃の如くに湛へられた靈泉に、疲れた躰軀を浸し乍ら枕の山を見ると、花崗岩壁の斷崖の間に、層々として茂れる巨幹老樹の、今しも霜葉の夕陽に輝く樣の麗しい事、只夢の樣である。浴し終つて二階に昇り窓を押すと、前面對岸の紅葉の壯觀が一眸の下に集りて、一大屏風の如き懸崖は、只七色の彩具をぶつ返へした樣である。

岩壁に盤屈せる檜や赤シデ何れも二抱もある老幹が、其の荒れた枝を懸崖に突出して、下から上に層々として重なれる樣を見上げるから、其の梢のこんもりとした鮮かな紅葉の上に、次の黑き鐵の如き幹や枝が見えて、一層梢の色を引立てるのである。而して湯霧の瀑が數百尺の上から數十の段をなして、其の紅葉の間を縱に貫いて居る。更に其の岩脚には黑薙川の奔湍が白沫を揚げて咽んでゐる、宛然是れ一幅の畫である。

黑薙の谿谷に於て紅葉の最も壯觀なるは、恐らくは瘤杉谷附近であらふ。

温泉より二見温泉の横を通りて溯ること約十町、イラ谷の下戸より、瘤杉谷の全谿谷を眺むるあたり、其の地形の奇拔なると、紅葉樹の多くして、特に色の鮮麗なるとは、恐らく他に多く比類が無い、黑部谿

谷以外に於て、強て同構の地を求むれば、日光の諸山中、方等瀑盤若瀑附近の景觀或は之れに近からんか。

右手に見ゆる對岸は、ザラク谷の續きで、危巖嵬嶂の間に栂、杉の常綠樹と共に濃淡各種の紅葉が粧點して屋る。左手は瘤杉谷で、見上ぐると宙空に突出た危巖の岌嶪たるあたり、燃えたつ紅葉の美しい事。大小斧劈の參差せる岩壁の皺法の奇拔なる間に、濃綠の栂、姫子松等針葉樹の巨幹が立雜つて、剛直なる枝を空谷へ差出してゐる。

其の前面に打豁けた谿間には、花崗岩の巨塊が、磊砢として全谿谷を壓し、滿溪の水は白沫を揚げて、其の間に咆哮してゐる。更に遠く前方を眺むる時、此谿間へ突出た南向の一山稜がある、蓊鬱たる濶葉樹の陽光を眞正面に受くるを以て、其の紅葉の鮮麗なる事は、實に目醒る許りである。殊にハウチハカヘデ、ヤマモミヂ、メグスリノキ等と共に、イタヤ、オガラバナ、ヒトツバカヘデ等、械樹科植物の間に、水楢、赤シデ、フサザクラ、タニグワ等の紅黃褐色なるが、互に錯綜して遠く連なつて居る、其の間に黑薙川が遠くから蜿蜒長蛇の如く、兩崖の霜葉を穿ちて流れて來る。而して是等の紅葉の間から、白帽を被ぶつた遠山の頂が見えて居る。

更に黑部峡谷の上流地方なる、鐘釣附近、小黑部、猿飛、祖母谷附近の秋色に至りては、十月の中旬より既に其の美觀を擅にして居るのである。其他各地至る處、黑部獨特の懸崖の間に、濃綠なる常綠樹と共に、猩紅血の如き紅葉の照り榮える樣は、實に見事である。恁くて十月の中旬から、十一月の上旬にかけて、十里に餘る黑部の峡谷は、紅葉錦に照り輝くのである。

三　峡谷より諸高山へ

黑部峡谷に於ける交通の幹線は、日本北アルプス交通路の愛本＝大

黒線にして、省線三日市驛より黒部鐵道に乘換へ約七哩にして、黒部の門戸たる愛本に至り、更に縣道によりて内山村より次第に黒部川の上流を溯る、宇奈月より黒部林道に移り黒薙、鐘釣、小黒部、猿飛を經て、祖母谷川の落合**欅平**まで約九里の間は全く黒部の本流に沿ふものである。之れより東に本流を離れて祖母谷川に沿ひ、祖母谷温泉場に至り、祖父谷に入りて**南越**（ナンコシ）を上り、大黒鑛山に至り、更に東に進みて大黒岳と唐松岳との間より、八方池方面に、新に改修せられたる新道を經て、北安曇郡神城村飯森に出で、糸魚川街道に連絡する、之れより南に本街道を進むこと約六里にして大町に達する。

此間にありて**猿飛**附近より林道を西に離れて小黒部川を溯り、**劔澤**に出で立山並に佐良、五色ヶ原方面に通する跡ばかりなる歩道、所謂**佐良＝猿飛線**がある。

黒部より日本北アルプス諸高山への登路は、何れも以上の交通幹線に基く。

（一）白馬岳へ

黒部方面よりの登路としては、**祖母谷より、猫又川より、黒薙川より**の三路がある、何れの方面よりにしても、勿論定まつた路のあるものでは無い、只獵夫や測量隊員の嘗て登りし跡を辿るのみである、何れにしても、其の方面に熟せる人夫を要する。

祖母谷方面より　愛本温泉又は黒薙温泉にて、人夫其他の準備をなして早朝出發、祖母谷温泉場小屋にて一泊する、翌朝早起祖母谷川を渡りて、右岸に通ぜる林道を辿ること十七八町にして林道は盡きる、これより岩壁の間、又は雜木の間を辿る事五六町にして河原に下り、河を徒渉する、諸所絶崖をなせる處ありて、密林の間を迂廻する必要がある。

温泉場より約一里にして、硫黄澤（五萬分一地圖には夜澤とあり）と、

左より來る一溪の落合ふあり、此處には本流を左に越え、花崗岩の懸谷を攀ぢて谿間を溯る、次第に登ると河域漸く廣く、稍平夷となる。十五六町にして不歸岳方面より落來る一溪流を左に見て右の本流を辿る。溪間にはシナノナデシコ、ミソガハサウ、イハワウギ、センジュガンビ等あらはる。それより進むと立山ウツボグサ、ハンゴンサウ等と共に、ハナシノブを見るのは極めて珍しい。前面には清水岳附近一帶の頂上あらはれ、次で雪溪に移る。

西蝗花叢の間も過ぎて、清水岳三角点(二五八九・八米)所在地より南西に低下せる一稜の南側を登り、所謂**清水平**に着く。適當の露營地である。前面には清水岳の左の肩を掠めて、白馬岳の三角標が高く天飈に突立つてゐる。此地一帶高山植物の極めて豐富なるものがある。

之れより清水岳の脊梁を行きて南側を下り、更に草附の間を上りて、一鋭峰の南側を横に卷きつゝ、雪溪を踏みて、直ちに白馬岳の石室附

上頂の雪溪

池の平の乗越より見たる鋸山

近に着く。ウルップサウ、ックモグサ等目に附く。之れよりは一帶の地緩傾斜を以て頂上に續く、清水平より約二時間を要する。頂上には一等三角標がある、海拔二九三三・一米之れより信州方面に下るには頂上より石室附近に下り、更に七八町にして東側の降路に就き葱平を經て白馬尻の大雪溪に移り、北又入に沿ひ、頂上より約四里半にして北安曇郡細野村に着く。

若し頂上より越後方面に下らんには、頂上より北に向ひ尾根を下り、鉢ケ岳の東北面の一溪を下ると、一縷の徑路を見出す、これより鑛山跡に出で、更に蓮華温泉を經て大所村に至り、糸魚川町に達する。

猫又川より　猫又川の右岸に通ずる國有林の歩道に就きて、雜木林の間を辿る。突坂山(鷄冠山)の南側、猫又川に逼る處、多く絶壁をなしてゐる、約二十町にして北より一溪流の落合ふあり、更に進みて橋によりて、數回河を左右に越える、林道の終点附近に及びて河原に下

り、溯ると、溪流は左右に岐れて、前面に緩漫なる傾斜をなせる一山稜を見る、此あたりは好露營地である。其中央なる山稜に就く、之れより打茂れる雜木林の間を穿ちて次第に登ると、ヲズコ、栂、白檜等あらはる。喬木帶を離れて眼界漸く廣くなる、かくて清水平の南西に低下せる一稜に達する、之れよりネヨガリ竹ナ、カマド、ホツ、ジ等の間を過ぎ、諸所に濕洳の地あり、高山植物の色調漸く濃厚となる。

かくて次第に登りて、清水平に着く。

黑薙方面より　此登路は容易でない、寧ろ此方面を避けて他の登路を選ぶがよい。

嘗て三角測量隊員の通行の頃にありては、諸所橋梁又は切開きなどありしも、其の後吊橋の切斷、諸所崩壞等の爲め、今は一層の不便を感ずるのである、熟練の人夫其他十分の準備を要すべきは云ふまでも無い。

黑薙温泉に於て、人夫其他の準備を整ひ、黑薙川の右岸林道を辿り、瘤杉にて河原に下り、巨岩の間を辿りて深曾(フカソ)の吊橋によりて左岸に就く、稍行きて深曾谷を渡り、或は河原の間を渡り、又は雜木林の間を迂廻す。手洗足洗等の絶壁を傳ひて宮林の平原に着く。之れより音神鑛山を經、猫又山と突坂山と連絡せる東西の山脈に殆んど直交して、南より北に突出せる一山稜を横斷して、黑薙川の上流なる柳又川に出る、之れよりカシ薙深曾の一支流を渡り、左岸に就きて上流へと辿る、之より著しく南に向ふ。凡そ二十町にして、小川方面より北又に出で、横山峠を經て柳又に達する徑路に會す。稍行きて柳又の小屋跡に着く、好露營地である、それより清水岳に登り清水平を經て白馬岳に至る。

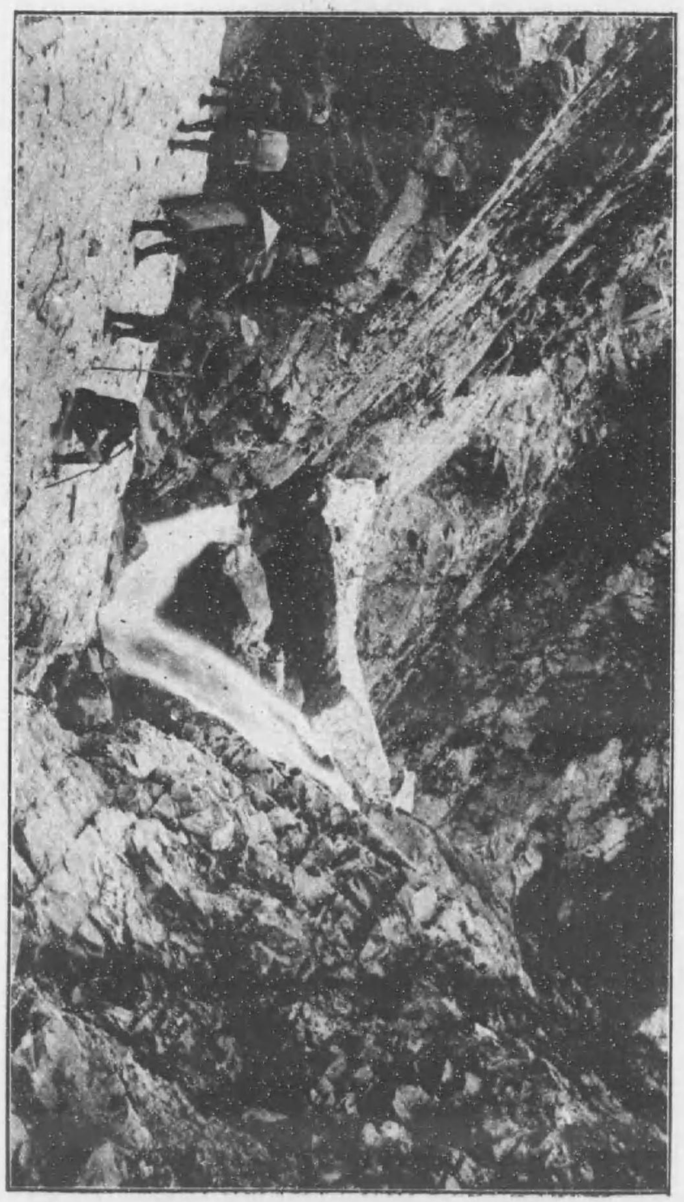
(二)　**鑓ケ岳へ**　祖母谷硫黄澤より

祖母谷川を溯りて、左より來る一支谷との落合に至り、更に本流な

る硫黄澤を辿る。幾たびか河を徒渉して次第に河原を溯る。落合より十五町許にして溪水二つに岐れる。五萬分一地圖にては、此二溪流の水源に大なる誤りがある。右なるは鎚ケ岳の西側に發源せる小支流で、左なるは白馬岳より清水岳の南側を流れて來るもので、祖母谷川の本流である。右の支流を溯りて、其水源の極まる處、硫黄の堆積層あり、此にて崖を攀ぢて、鎚ケ岳の裾に着く。此附近に好露營地がある。之れより次第に頂上を辿れば、一時間許にして絶頂に達する、北に杓子岳を經て白馬岳に達すべく、又南に天狗岳より唐松岳に縱走して、大黒鑛山に出で、祖母谷温泉場に歸着する事が出來る。

（三）大黒方面五龍山より鹿島鎗ケ岳へ

祖母谷温泉場より南越を經て、大黒鑛山跡に着き、右に餓鬼谷に下り、五龍山に登る。此間に栂の美林がある。五龍山より鹿島鎗ケ岳に縱走するには所謂八方の險所あり、熟練なる案内者なくては、一歩も



小黒部の川流

劍　山　の　遠　望

進む事の出來ぬ處があるから、十分の用意が必要である。

（四）劍嶽並に立山へ

猿飛附近より小黑部川に下る峠の途中より、左に林道を離れて小黑部川を溯る。此登路は近來特に險阻を加ふるものあり、特に徒涉の際十分の注意を要す。大拔ケ小拔ケを經て、小黑部川の終点**劍の大窓**を右に望み、左に一雪溪を登りて、池ノ平小屋に就き、池ノ平を經て劍澤に下る。卽ち小窓、三窓を右に望みて劍澤の南又に移り、別山谷方面に向ひ、雪溪を登る時、右より一雪溪の來たるものを見る。**長次郎谷**である。之れに就いて急峻なる雪溪を登る。途中に於て一大巖石のありて、此雪溪を三分するものあり。從うて登路を三分する、左は最も急峻だが捷徑である。右端のものは最も安全にして迂廻である。雪溪を登り詰めて、草附の鞍部に就く。之れより南亂岩の間に路を拾ひ、進んで頂上に達する。小窓の雪溪を登りて、北より南に劍岳の尾根傳

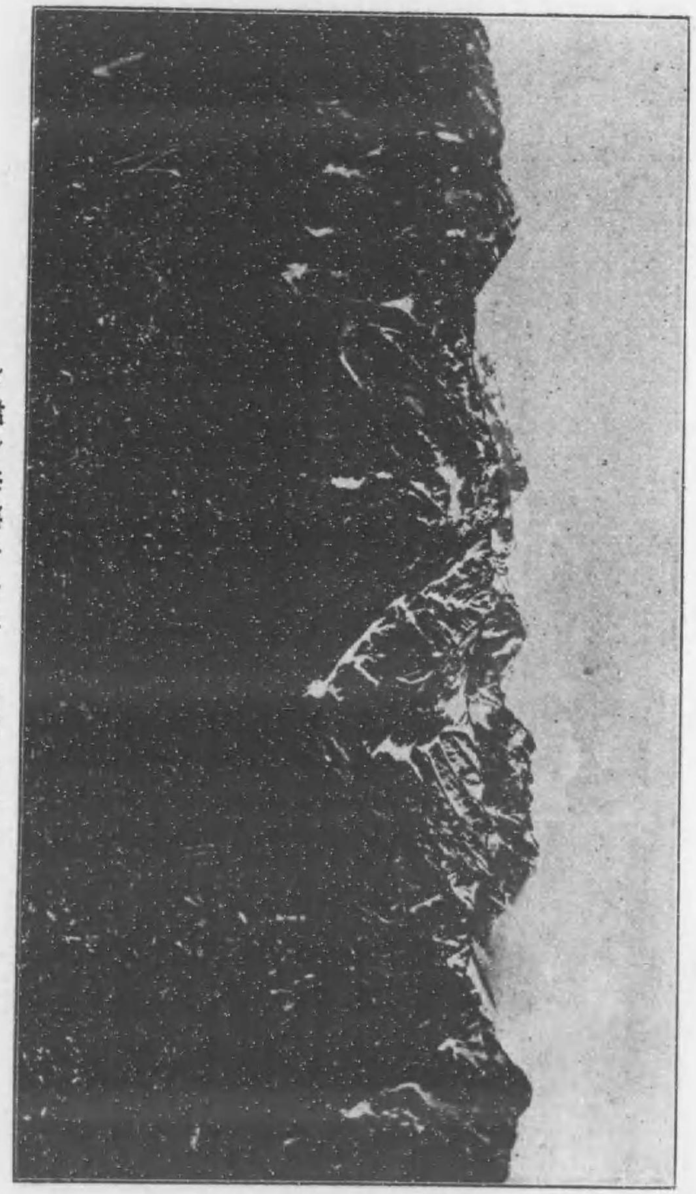
ひにも登れるが、容易では無い。長次郎谷よりするもの最も安全である。

之より別山北谷の雪渓を辿りて、別山に登り、それより南に尾根を辿りて立山の頂上に達する。

四　峡谷の事業

（一）水力電氣

黒部峡谷に於て、一大水電事業を計畫せる東洋アルミナム會社は、本社を大阪市東區今橋町三丁目十九番地に置き、資本金壹千萬圓、社長山岡順太郎、專務取締役池尾芳藏、水力部長山田胖を選任し、鋭意黒部川及神通川に於て、水力發電の準備中である。本社の有する水利權は、既許可のもの黒部川約十四萬馬力、神通川四萬馬力にして、目下出願中のものを合すれば、實に三十萬馬力（主として黒部川にて）に



立山より越雄谷父祖を望む

達するのである。

本社の黑部川出張所は、内山村の宇奈月平に設けられてある。目下第十號地点（四萬キロ）の實施準備工事として、買收したる黑部水力（元富山水力）の實施中にて竣工は大正十二年八月に豫定されて居る。そして第十號地点の實施は、目下工事中の黑部鐵道第二期線が、宇奈月の終点迄到達すると同時に、右の黑部水力より得たる動力により、着手せらるゝ筈である。

尙同時に宇奈月平より、上流鐘釣迄の林道改修の必要起り、目下大阪大林區署の許可を得て、是亦改修實測設計を了し將に起工せんとしてゐる。

黑部川に於ける水力發電根本調査としては、宇奈月平及鐘釣溫泉に部署を定め、夏冬間斷なく水量測定其他の調査を進められて居る、此調査も遠からず完了して、軈て實施期が到來するであらう。

(二) 電氣鐵道

秀麗雄偉の黑部峽谷を、天然の大公園として、將た北陸第一の溫泉地帶として、普く天下に紹介し、多數遊覽者の利便を計るには、交通の便を整ふ事が最も必要である。**黑部鐵道株式會社**は此意味から端なくも創立を見るに至つたものである。本會社の事業は、初め**東洋アルミナム會社**に依つて計畫されたのである、**東洋アルミナム會社**は黑部本支流に於て、**二十萬キロ**の水力を發生せしむる爲め着々準備を進めて居るが、其工事に要する多量の材料及機械の運搬は、是非共鐵道に依るの必要あり、それが爲め會社專用の鐵道を布設する目論見なりしも、黑部の開發及地方交通上の見地より、一會社の私すべきもので無いと斷定して、茲に**東洋アルミナム會社**と地方と協同して一般公衆の利便に供する地方鐵道を起す事になつたのである。

會社の概要

設立　大正十年十二月二十日
資本金　壹百萬圓
本社　大阪市東區今橋町三丁目十九番地
出張所　富山縣下新川郡三日市町
社長　池尾芳藏
鐵道の種類　地方鐵道(電氣動力)
免許　大正十年六月二十八日

本社は創立以前、既に大部分の測量が濟んでゐたのみならず、用地の買收も易く纏りて大正十一年十一月第一期線三日市下立間六哩二十鎖を開業し目下第二期下立宇奈月線の工事進行中である。此の狀況では三日市驛宇奈月驛間は豫定の通り本年九月迄に竣工して、翌十月より電車を運轉する事となるであらう。

停車場は沿線各町村の中央附近に置き、其他必要なる場所には乘降客の停留場を設ける計畫である。

三日市驛宇奈月線が開通せば、三日市驛より愛本迄は約三十分、宇

奈月迄は約四十五分にして到着する。而して三日市驛に於ける省線列車と連絡を計り約三十分間に發車せしむる筈である。

更に本社は、三日市驛より石田港に到る石田線、愛本より舟見町を經て泊驛及小川溫泉に到る愛本＝泊線を豫定線に加へ、其の上宇奈月より上流へ延長する將來の企望もある樣である。是等の豫定線が竣成の曉には、本郡に於ける交通系統が理想的に完備する事となるであらう。

（三）溫泉經營

黑部峽谷を溫泉地帶と爲し理想的療養地又無比の遊覽地として繁榮せしむべく、東京市鹽原又策氏等の發起により、端なくも**黑部溫泉株式會社**の創立を見るに至つた。本社は舊愛本溫泉會社及黑薙溫泉、二見溫泉の權利財產一切を讓り受け、客舍並に浴場等の大改善を爲し、引續き開湯して、浴客の利便を多からしめん事を目論見て居る。

會社の概要

設立　大正十一年五月株式募集
資本金　五拾萬圓
本社　富山市
支社　未定
發起人　鹽原又策外七名

第一期事業

一、黑薙湯は從來の建物を基とし、改善を加へて開湯すること
二、二見湯は建物の復舊及增築を爲し、目下營業中である
三、宇奈月湯の開始　宇奈月臺は空氣清鮮、風光佳絕の好遊覽地にして、且黑部鐵道の終點も此地なれば、此處に愛本湯を移轉し、尙旅宿別莊貸別莊、遊園地其他各種の文化的設備を完備し、黑部鐵道と協力經營して理想的溫泉地を作ること

近時登山熱の漸次旺盛なるに泉ひ、黑部遊覽者の逐年激增するは必然である、從て峽中の各溫泉場を賑はす事が多くなるであらう。此等の点から言ふと黑部溫泉の計畫が、彼の黑部鐵道と共に、所謂峽谷開發の急務の一を遂行するものである。斯くの如くにして黑部は天下の黑部として、其の絕勝を賞揚せらるゝ事となるだらう。

附記

黒部保勝會

天下の絶勝黒部峡谷を享有する我地方に於ては、之が自然美を保護し併て廣く之を世に紹介し、且一般探勝者の便宜を計りてその開發に努め、以て此の天恵に酬いむが爲めに、本郡内の有志相謀りて、大正十一年創て黒部保勝會が組織せられたのである。本部は三日市町に、支部は内山村役場及下立村役場内に置いて、地方官民中錚々たる名士愛山家を以て成り、而かも最も熱誠ある人士其の幹部となりて、大に劃策に努めつゝあるので、當初に於ては登山者の最も要望する、峡谷案内者を多數養成するを急務なりとして、該會幹部之を指導して、祖母谷、大黒、白馬方面の地理を踏査し、尚三日市、泊の兩省線停車場に峡谷案内圖を峡谷の各要所に指導標を各建設し、尚案内圖及登山心

得書を一般登山者に無代配付するの計畫を立てゝ居るのである。更に第二次の企としては、小黒部より劍山、立山、佐良、針ノ木方面に渉る案内者を養成し、尚進んで露營地に宿泊設備を成す等種々の計畫を立てゝ居る、幸に是等の擧にして完成し、倍々多方面に該會の活動旺となるに於ては、登山家の利便は頓に增大して、此の峡谷美は彌々天下に謳はるゝに至るのであらう、案内者の雇入等登山に關する照會は、内山又は下立の支部へ發せらるゝ方は便利である。

大正十一年六月廿六日印刷
大正十一年七月一日發行
大正十二年六月十日再版印刷
大正十二年六月廿五日改訂再版發行

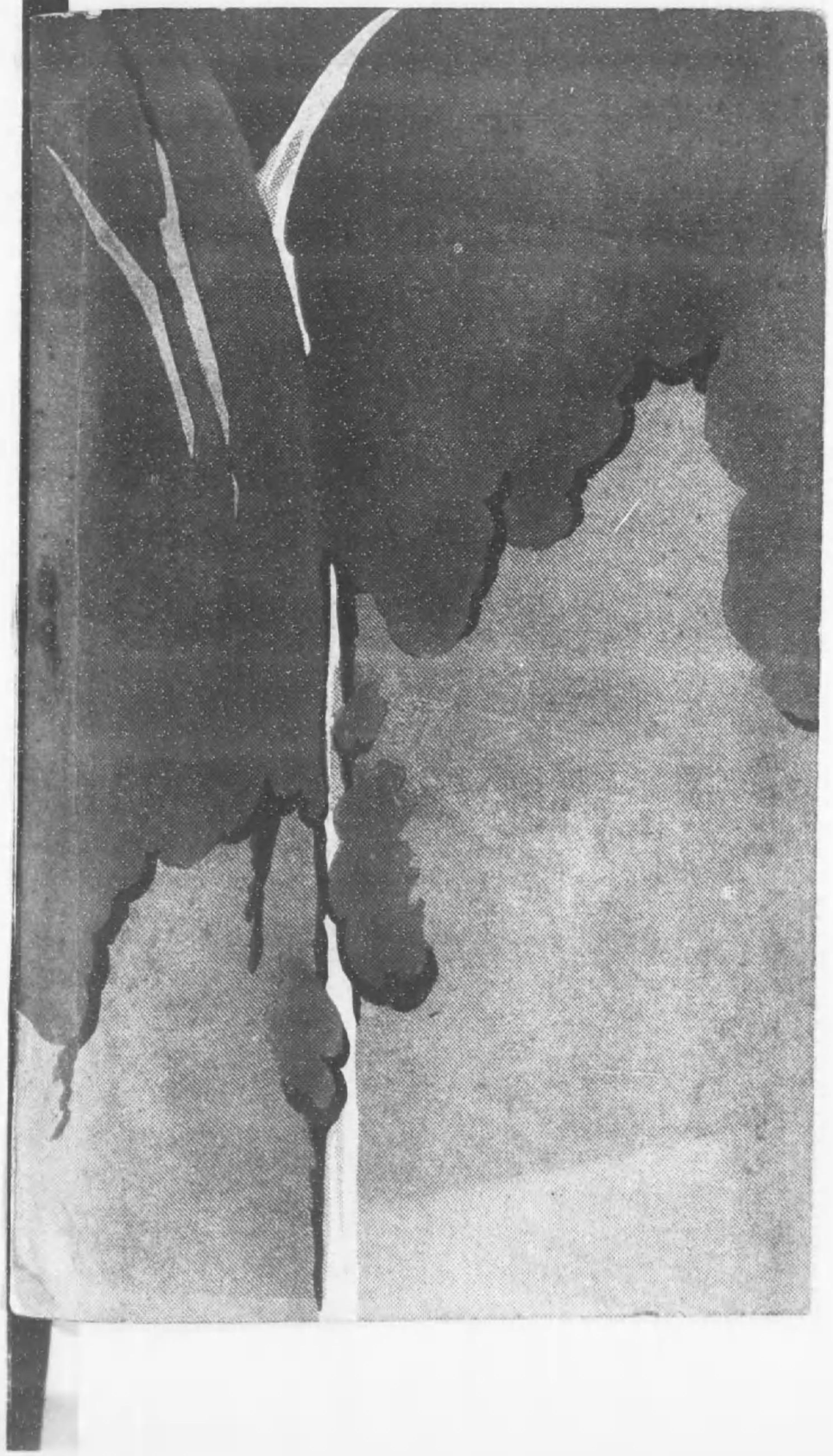
定價 金參拾錢（但郵税共）

編輯者 富山縣下新川郡役所

發行者 新村松次郎
富山縣下新川町魚津町字荒町

印刷者 大村重松
石川縣金澤市高岡町九十番地

印刷所 明治印刷株式會社
石川縣金澤市高岡町九十番地

291
509

終